

Acronis



Acronis Backup Advanced Update 1 11.7

該当する製品

Advanced for Windows Server

Advanced for Linux Server

Advanced for PC

Advanced for VMware / Hyper-V / RHEV / Citrix XenServer / Oracle VM

Advanced for Exchange

Advanced for SQL

Advanced for SharePoint

Advanced for Active Directory

For Windows Server Essentials

インストール ガイド

目次

1 インストールする前に	4
1.1 試用モードでの製品の使用について	4
1.2 Acronis Backup および Acronis Backup Advanced のライセンス	5
1.3 Acronis Backup コンポーネント	7
1.3.1 エージェント for Windows	8
1.3.2 エージェント for Linux	9
1.3.3 エージェント for VMware	10
1.3.4 エージェント for Hyper-V	10
1.3.5 エージェント for Exchange	11
1.3.6 エージェント for SQL	11
1.3.7 エージェント for Active Directory	12
1.3.8 集中管理用のコンポーネント	12
1.3.9 管理コンソール	15
1.3.10 ブータブル メディア ビルダ	15
1.4 Acronis Backup Advanced のライセンス	15
1.4.1 必要となるライセンスの数	17
1.4.2 仮想コンピュータのライセンス	17
1.5 サポートされるオペレーティング システム	18
1.6 システム要件	25
2 Acronis Backup Advanced のインストール	28
2.1 Windows でのインストール	28
2.1.1 Windows におけるインストール方法	28
2.1.2 ローカル インストール	31
2.1.3 グループ ポリシーを使用したエージェントのインストール	48
2.1.4 コンフィギュレーション スクリプトのパラメータ	53
2.1.5 管理サーバーのウェブ ページからのインストール	57
2.1.6 Acronis ライセンス サーバーのインストール	64
2.2 Linux でのインストール	65
2.2.1 準備	65
2.2.2 Acronis Backup Advanced の対話型インストール	69

2.2.3	無人モードでのインストール	71
2.2.4	コマンドライン パラメータ	72
2.3	リモート インストール	75
2.3.1	前提条件	76
2.3.2	準備	77
2.3.3	インストール手順	79
2.4	エージェント for VMware のインストール	84
2.4.1	エージェント for VMware (仮想アプライアンス) のインポート	87
2.4.2	エージェント for VMware (仮想アプライアンス) の更新	92
2.5	エージェント for Hyper-V のインストール	94
2.6	その他の仮想化プラットフォームへのインストール	95
2.7	エージェント for Exchange のインストール	96
2.8	エージェント for SQL のインストール	99
2.9	エージェント for Active Directory のインストール	101
	3 Acronis Backup から Acronis Backup Advanced へのアップグレード ..	102
	4 ソフトウェアのアップデートの確認	105
	5 アンインストール	105
5.1	Acronis Backup Advanced のアンインストール	105
5.1.1	Windows でのアンインストール	106
5.1.2	Linux でのアンインストール	109
5.2	エージェント for VMware (仮想アプライアンス) の削除	109
5.3	Acronis セキュア ゾーンの削除	111

1 インストールする前に

このセクションでは、製品のインストール前に生じることが予想される疑問点について説明します。

1.1 試用モードでの製品の使用について

Acronis Backup のライセンスを購入する前に、ソフトウェアを試してみることが可能です。試用版は、プロダクト キーなしで使用できます。

試用モードで製品をインストールするには、セットアップ プログラムをローカルで実行するか、リモート インストール 『75ページ』機能を使用します。無人インストールとその他のインストール方法 『28ページ』 は、サポートされていません。

試用モードの制限

Acronis Backup を試用モードでインストールする場合、次のような制限事項があります。

- Universal Restore 機能は無効になっています。

ブータブル メディアに関するその他の制限事項は次のとおりです。

- ディスク管理機能は使用できません。ユーザー インターフェイスを試用することはできませんが、変更を適用するオプションはありません。
- 復元機能は使用できますが、バックアップ機能は使用できません。バックアップ機能を試用するには、本ソフトウェアをオペレーティング システムにインストールしてください。

完全モードへのアップグレード

試用期間が終了すると、製品の GUI にプロダクト キーを指定または取得するように求める通知が表示されます。

プロダクト キーを指定するには、**[ヘルプ]** > **[ライセンスの変更]** をクリックします。セットアップ プログラムを実行することによってプロダクト キーを指定することはできません。

クラウド バックアップ サービスの試用サブスクリプションをアクティブ化するか、サブスクリプションを購入した場合、プロダクト キーを指定しているかどうかに関係なく、サブスクリプションの有効期限が切れるまでクラウド バックアップを利用できます。

1.2 Acronis Backup および Acronis Backup Advanced のライセンス

Acronis Backup 製品ファミリおよび Acronis Backup Advanced スイートのライセンスは、その製品によるバックアップ対象のコンピュータ数に基づいています。ライセンスは、バックアップ対象となる物理コンピュータごとに必要です。

次の表は、製品とその主な機能の一覧です。

製品	ディスクおよびファイルのバックアップ	集中管理	重複除外	テープへのバックアップ	アプリケーションのバックアップ
Acronis Backup for Windows Server	+	-	-	-	-
Acronis Backup for Linux Server	+	-	-	-	-
Acronis Backup for PC	+	-	-	-	-
Acronis Backup for Windows Server Essentials	+	+	+	+	すべてサポート*
Acronis Backup Advanced for Windows Server	+	+	+	+	-
Acronis Backup Advanced for Linux Server	+	+	+	+	-
Acronis Backup Advanced for PC	+	+	+	+	-
Acronis Backup Advanced for Exchange	+	+	+	+	Exchange

製品	ディスクおよびファイルのバックアップ	集中管理	重複除外	テープへのバックアップ	アプリケーションのバックアップ
Acronis Backup Advanced for SQL	+	+	+	+	SQL
Acronis Backup Advanced for SharePoint	+	+	+	+	SQL、SharePoint
Acronis Backup Advanced for Active Directory	+	+	+	+	Active Directory
Acronis Backup Advanced for VMware / Hyper-V / RHEV / Citrix XenServer / Oracle VM	+	+	+	+	すべてサポート*

*サポートされるアプリケーション: Microsoft Exchange Server、Microsoft SQL Server、Microsoft SharePoint、および Microsoft Active Directory。

集中管理機能を備えていない製品は、単一のコンピュータのデータをバックアップするためのものです。どの製品も、すべてのコンポーネントが同じコンピュータ上にインストールされます。インストール時にプロダクト キーを入力する必要があります。

Acronis Backup Advanced スイートは、複数のコンピュータをバックアップするためのものです。これらの製品には、バックアップ対象のコンピュータにインストールする必要があるコンポーネントに加え、集中管理を可能にする管理サーバー、およびバックアップしたデータを保存するためのストレージ ノードが含まれています。これらの追加のコンポーネントの使用にライセンスは必要ありません。たとえば、ストレージ ノードは最大 50 までの必要な数をインストールすることが可能です。

ライセンスが必要なコンポーネント（エージェント）のインストール中、ライセンス サーバーを指定するか、手動でプロダクト キーを入力することができます。特定の製品のライセンスまたは Acronis Backup Advanced Universal License を使用してください。このライセンスでは、1 台の物理コンピュータとその物理コンピュータで実行されている任意の数の仮想コンピュータに、すべての Acronis Backup Advanced 製品をインストールできるようになります。

ネットワークを構成するサーバーが 1 台だけでワークステーションが複数の場合は、Acronis Backup for Windows Server Essentials をお勧めします。この製品をサーバー上で使用し、Acronis Backup Advanced for PC をワークステーション上で使用すると、すべてのコンピュータを集中管理できます。ドキュメントでの Acronis Backup Advanced の機能に関する説明のほとんどは、Acronis Backup for Windows Server Essentials にも当てはまります。

その他の Acronis Backup 製品のコンポーネントは、Acronis Backup Advanced のコンポーネントとは連携しません。

1.3 Acronis Backup コンポーネント

Acronis Backup には、主に次の種類のコンポーネントがあります。

管理対象のコンピュータ用のコンポーネント（エージェント）

これらは、Acronis Backup によって管理されるコンピュータ上でデータのバックアップ、復元、その他の処理を実行するアプリケーションです。各管理対象のコンピュータ上でエージェントが処理を実行するにはライセンスが必要です。

集中管理用のコンポーネント

Acronis Backup Advanced に含まれるこれらのコンポーネントは、集中管理機能を提供します。これらのコンポーネントの使用にライセンスは必要ありません。

コンソール

コンソールは、他の Acronis Backup コンポーネントに対するグラフィカル ユーザー インターフェイスを提供します。コンソールの使用にライセンスは必要ありません。

ブータブル メディア ビルダ

ブータブル メディア ビルダを使用して、エージェントや他のレスキュー ユーティリティをレスキュー環境で使用するためのブータブル メディアを作成することができます。

エージェントとともにインストールされた場合、ブータブル メディア ビルダにはライセンスが必要ありません。エージェントなしのコンピュータでメディア ビルダを使用するには、プロダクト キーを入力するか、ライセンス サーバーに少なくとも 1 件のライセンスを所

有している必要があります。ライセンスは利用可能な場合と割り当てられる場合があります。

1.3.1 エージェント for Windows

このエージェントを使用して、Windows の下でディスク レベルおよびファイル レベルでデータを保護することができます。

ディスクのバックアップ

ディスク レベルでのデータ保護は、ディスク全体またはボリューム ファイル システム全体と、オペレーティング システムの起動に必要なすべての情報のバックアップ、または、セクタ単位のバックアップを使用したすべてのディスク セクタのバックアップ (RAW モード) を基にしています。ディスクまたはボリュームのコピーがパッケージ化された状態で格納されているバックアップを、ディスク (ボリューム) バックアップまたはディスク (ボリューム) イメージと呼びます。これらのバックアップからはディスクまたはボリュームの全体を復元することも、個別のフォルダやファイルを復元することもできます。

ファイルのバックアップ

ファイル レベルでのデータ保護は、エージェントがインストールされているコンピュータ、またはネットワーク共有上にあるファイルおよびフォルダのバックアップに基づいています。ファイルは、元のロケーションにも他のロケーションにも復元できます。バックアップしたすべてのファイルおよびフォルダを復元することもできれば、一部のみを選択して復元することもできます。

その他の操作

仮想コンピュータへの変換

エージェント for Windows による変換では、ディスク バックアップが VMware Workstation、Microsoft Virtual PC、Citrix XenServer Open Virtual Appliance (OVA)、または Red Hat Kernel-based Virtual Machine (KVM) のいずれかの種類の新しい仮想コンピュータに復元されます。設定済みで使用可能なコンピュータのファイルは、選択したフォルダに保存されます。それぞれの仮想ソフトウェアを使用してコンピュータを起動するか、他の用途のためにコンピュータのファイルを準備することができます。

異なるハードウェアへの復元

エージェントがインストールされているコンピュータ上で異なるハードウェアの復元機能を使用して、この機能を備えたブータブル メディアを作成することができます。Acronis Universal Restore は、ストレージ コントローラ、マザーボード、チップセットなどの、オペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

ディスクの管理

エージェント for Windows には、Acronis Disk Director Lite (使いやすいディスク管理ユーティリティ) が用意されています。ディスクのクローン作成、ディスクの変換、ボリュームの作成、ボリュームのフォーマット、ボリュームの削除などのディスク管理操作、および MBR と GPT の間のディスク パーティション スタイルの変更、ディスク ラベルの変更などの操作は、オペレーティング システムで実行するかブータブル メディアを使用して実行することができます。

1.3.2 エージェント for Linux

このエージェントを使用して、Linux の下でディスクレベルおよびファイルレベルでデータを保護することができます。

ディスクのバックアップ

ディスクレベルのデータ保護では、ディスクまたはボリューム ファイル システム全体とオペレーティング システムの起動に必要なすべての情報のバックアップ、またはセクタ単位でのすべてのディスク セクタのバックアップ (RAW モード) が基本になります。ディスクまたはボリュームのコピーがパッケージ化された状態で格納されているバックアップを、ディスク (ボリューム) バックアップまたはディスク (ボリューム) イメージと呼びます。これらのバックアップからはディスクまたはボリュームの全体を復元することも、個別のフォルダやファイルを復元することもできます。

ファイルのバックアップ

ファイルレベルのデータ保護では、エージェントがインストールされているコンピュータ上あるいは smb または nfs プロトコルを使用してアクセスされるネットワーク共有上に存在するファイルおよびディレクトリのバックアップが基本になります。ファイルは、元の口

ケーションにも他のロケーションにも復元できます。バックアップされたすべてのファイルとディレクトリを復元することも個別に選択して復元することもできます。

仮想コンピュータへの変換

エージェント for Linux による変換では、ディスク バックアップが VMware Workstation、Microsoft Virtual PC、Citrix XenServer Open Virtual Appliance (OVA)、または Red Hat Kernel-based Virtual Machine (KVM) のいずれかの種類の新しい仮想コンピュータに復元されます。設定済みで使用可能なコンピュータのファイルは、選択したディレクトリに保存されます。それぞれの仮想ソフトウェアを使用してコンピュータを起動するか、他の用途のためにコンピュータのファイルを準備することができます。

異なるハードウェアへの復元

エージェントがインストールされているコンピュータ上で異なるハードウェアの復元機能を使用して、この機能を備えたブータブル メディアを作成することができます。Acronis Universal Restore は、ストレージ コントローラ、マザーボード、チップセットなどの、オペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

1.3.3 エージェント for VMware

Acronis Backup エージェント for VMware は、ゲスト システムにエージェントをインストールすることなく、ESX(i) 仮想コンピュータのバックアップと復元を可能にします。このバックアップ方法は、エージェントレス バックアップまたはハイパーバイザ レベルのバックアップと呼ばれています。

このエージェントは、次の 2 つのバージョンで提供されます。

- エージェント for VMware (仮想アプライアンス) は VMware ESX(i) ホストにインポートまたは配置することができます。
- オフロード バックアップのために、エージェント for VMware (Windows) は Windows コンピュータにインストールすることができます。

1.3.4 エージェント for Hyper-V

Acronis Backup エージェント for Hyper-V は、Hyper-V 仮想サーバー内の仮想コンピュータを保護します。このエージェントを使用すると、各仮想コンピュータにエージェントを

インストールしなくても、ホストから仮想コンピュータをバックアップすることができます。

1.3.5 エージェント for Exchange

Acronis Backup エージェント for Exchange を使用すると、Microsoft Exchange データベースまたは個別のメールボックスをバックアップおよび復元できます。

このエージェントは Microsoft VSS を使用して、バックアップされたデータベースが確実に整合するようにします。より小さいデータ項目（電子メール、予定表のイベント、メモ）の復元には、データベースのバックアップとメールボックスのバックアップのどちらも使用できます。

このエージェントは、Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムに含まれています。

エージェントはエージェント for Windows 『8ページ』 と共にインストールするか、エージェント for Windows が既にインストールされているコンピュータにインストールします。

1.3.6 エージェント for SQL

Acronis Backup エージェント for SQL を使用すると、シングル パスのディスクとアプリケーションのバックアップを作成したり、これらのバックアップから Microsoft SQL データベースを復元することができます。これらのデータベースは実行中の SQL Server インスタンスに直接復元できます。また、ファイル システム上のフォルダに抽出することもできます。

このエージェントは Microsoft VSS を使用して、バックアップされたデータベースが確実に整合するようにします。バックアップが成功すると、エージェントは SQL Server トランザクション ログを切り捨てることができるようになります。

このエージェントは、Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムに含まれています。

エージェントはエージェント for Windows 『8ページ』と共にインストールするか、エージェント for Windows が既にインストールされているコンピュータにインストールします。

1.3.7 エージェント for Active Directory

Acronis Backup エージェント for Active Directory を使用すると、シングル パスのディスクとアプリケーションのバックアップを作成したり、そのバックアップから Microsoft Active Directory データをファイル システムのフォルダに抽出したりできます。

このエージェントは Microsoft VSS を使用して、バックアップされたデータが確実に整合するようにします。

このエージェントは、Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムに含まれています。

エージェントはエージェント for Windows 『8ページ』と共にインストールするか、エージェント for Windows が既にインストールされているコンピュータにインストールします。

1.3.8 集中管理用のコンポーネント

ここでは、集中管理機能を提供する Acronis Backup Advanced の構成コンポーネントについて説明します。これらのコンポーネントに加えて、データ保護が必要なすべてのコンピュータに Acronis Backup エージェントをインストールする必要があります。

1.3.8.1 管理サーバー

Acronis Backup 管理サーバーは、企業ネットワーク内のデータ保護を管理する中央サーバーです。次の機能を管理者に提供します。

- Acronis Backup インフラストラクチャへの単一のエントリ ポイント
- 集中管理されるバックアップ計画とグループを使用して、多数のコンピュータ上のデータを簡単に保護する方法
- 仮想コンピュータの検出/保護を目的とした VMware vCenter との統合
- 全社規模の監視およびレポート機能

- ビルトインのライセンス管理
- 全社のバックアップ アーカイブを保存するための集中管理用格納域を作成する機能
- ストレージ ノードを管理する機能
- ストレージ ノードに保存されるすべてのデータが集中管理されるカタログ

ネットワーク上に複数の管理サーバーがある場合、それらのサーバーは独立して動作し、異なるコンピュータを管理し、異なる集中管理用格納域を使用してアーカイブを保存します。

1.3.8.2 ストレージ ノード

Acronis Backup ストレージ ノードは、企業データの保護に必要なさまざまなリソース（企業のストレージ容量、ネットワーク帯域幅、管理対象のコンピュータの CPU 負荷など）の使用を最適化するように設計されたサーバーです。この目的は、企業のバックアップ アーカイブ（管理対象の格納域）の専用ストレージとして機能する場所の作成と管理によって達成されます。

ストレージ ノードの最も重要な機能は、格納域に保存されるバックアップの重複除外です。つまり、同一のデータはこの格納域に一度のみバックアップされます。この方法により、バックアップ中のネットワーク使用量およびアーカイブによって使用されるストレージ容量が最小限に抑えます。

ストレージ ノードを使用すると、ハードウェア サポートの観点から拡張性と柔軟性に優れたストレージ インフラストラクチャを作成することができます。最大 50 のストレージ ノードを設定することが可能で、それぞれのノードが最大 20 の格納域を管理することができます。

管理者は、Acronis Backup 管理サーバー 『12ページ』からストレージ ノードを集中的に制御します。コンソールをストレージ ノードに直接接続することはできません。

1.3.8.3 リモート インストールのコンポーネント

リモート コンピュータでインストールを行うための管理コンソール 『15ページ』によって使用される Acronis コンポーネント インストール パッケージです。

リモート インストールのコンポーネントは、コンソールまたは管理サーバー 『12ページ』が存在するコンピュータにインストールする必要があります。インストール中、セットアップ

プログラムはコンポーネントをデフォルトのロケーションに保存し、このロケーションへのパスをレジストリに保存します。その結果、これらのコンポーネントは「登録済みコンポーネント」として、リモート インストール ウィザード 『75ページ』で簡単に使用できるようになります。

1.3.8.4 PXE サーバー

Acronis PXE サーバーを使用すると、ネットワーク経由で Acronis ブータブル コンポーネントを使用してコンピュータを起動することができます。

ネットワーク ブートには次の利点があります。

- 起動する必要があるシステムにブータブル メディアをインストールする技術者を現地で待機させる必要がなくなります。
- グループ操作の実行では、物理的なブータブル メディアを使用するときに比べて、複数のコンピュータを起動するのに必要な時間が短縮されます。

1.3.8.5 ライセンス サーバー

ライセンス サーバーを使用すると、Acronis 製品のライセンスを管理して、ライセンスが必要なコンポーネントをインストールすることができます。

ライセンス サーバーを個別のコンポーネントとしてインストールする 『64ページ』ことも、管理サーバーに統合されたものを使用することも可能です。ライセンス サーバーの機能は、どちらの種類インストールでも同じです。

1.3.8.6 Acronis Wake-On-LAN プロキシ

Acronis Wake-On-LAN プロキシを使用すると、他のサブネットにあるコンピュータをバックアップする場合に Acronis Backup 管理サーバーを起動できます。Acronis Wake-On-LAN プロキシは、バックアップするコンピュータが配置されているサブネット内の任意のサーバーにインストールできます。

1.3.9 管理コンソール

Acronis Backup 管理コンソールは、Acronis Backup エージェントにアクセスするための管理ツールです。Acronis Backup Advanced の場合、Acronis Backup 管理サーバーへのアクセスにも使用します。

コンソールには、Windows および Linux にインストールする 2 つのディストリビューションがあります。どちらのディストリビューションでも任意の Acronis Backup エージェントおよび Acronis Backup 管理サーバーに接続できますが、どちらか選択できる場合は Windows 用のコンソールを使用することをお勧めします。Linux にインストールするコンソールの機能には次のような制限があります。

- Acronis Backup コンポーネントをリモート インストールできません。
- Active Directory の参照などの Active Directory 関連の機能を使用できません。

1.3.10 ブータブル メディア ビルダ

Acronis ブータブル メディア ビルダは、ブータブル メディアを作成するための専用のツールです。Windows および Linux にインストールする 2 つのメディア ビルダ ディストリビューションがあります。

Windows 上にインストールするメディア ビルダは、Windows プレインストール環境、または Linux カーネルをベースにしたブータブル メディアを作成できます。Linux 上にインストールするメディア ビルダは、Linux カーネルをベースにしたブータブル メディアを作成できます。

1.4 Acronis Backup Advanced のライセンス

Acronis ライセンス サーバー

Acronis Backup Advanced のライセンスは Acronis ライセンス サーバーによって管理されます。ライセンス サーバーを個別のコンポーネントとしてインストールする 『64ページ』 ことも、管理サーバーに統合されたものを使用することも可能です。ライセンス サーバーの機能は、どちらの種類インストールでも同じです。

Acronis ライセンス サーバーは、.txt ファイルまたは .eml ファイルから複数のプロダクト キーをインポートできるため、数字の入力作業にかかる時間を短縮することができます。

インストール中におけるライセンスの指定

ライセンスが必要なコンポーネント（エージェント）のインストール中、ライセンス サーバーを指定するか、手動でプロダクト キーを入力することができます。管理サーバーにコンピュータを登録すると、手動で入力したキーはサーバーにインポートされ、ライセンスの一覧に表示されます。

次の場合、ライセンスやライセンス サーバーを指定することなくエージェントをインストールできます。

- 試用モード 『4ページ』 で本ソフトウェアをインストールする場合：
- クラウド バックアップ専用本ソフトウェアをインストールする場合： オンライン バックアップではライセンスは不要ですが、Acronis Cloud Backup サービスのサブスクリプションは必要です。
- エージェント for VMware 『10ページ』（両方のバージョン）をインストールする場合： 指定した仮想コンピュータのバックアップ開始時にライセンスが消費されます。仮想コンピュータがバックアップ対象として選択されているホストごとに、1 つのライセンスが必要です。

ライセンスの確認

Acronis エージェントは、エージェント サービスが開始されるたびに Acronis ライセンスサーバーに接続し、以降はエージェントの設定パラメータに従って、1~5 日ごとに接続します。エージェントをライセンスサーバーに接続できない場合、アラートが開始します。エージェントは、ライセンスサーバーがなくとも 1~60 日間（構成パラメータで指定された日数）機能します。その後、エージェントはライセンスの確認が正常に完了するまでバックアップ（クラウド バックアップを除く）を停止します。

エージェントがライセンスサーバーに接続されていても、取得されたライセンスがない場合は、別のライセンスを取得しようとします。利用可能なライセンスがない場合、エージェントはライセンスが正常に取得されるまでバックアップ（クラウド バックアップを除く）を停止します。

デフォルトでは、エージェントはライセンス サーバーに対して毎日接続を試行し、ライセンス サーバーがなくても 30 日間機能します。

1.4.1 必要となるライセンスの数

会社のネットワークが、Windows を実行する 1 台のサーバーと 5 台のワークステーションで構成されているとします。すべてのコンピュータは、1 つの場所からバックアップを設定および監視する管理者によってバックアップされます。したがって、Acronis Backup Advanced のライセンスを検討します。ワークステーションのライセンスは、サーバーのライセンスよりもコストがかかりません。

すべてのコンピュータを保護するためには、次のライセンスが必要です。

- Acronis Backup Advanced for PC のライセンス 5 個。
- Acronis Backup Advanced for Windows Server のライセンス 1 個。

1.4.2 仮想コンピュータのライセンス

仮想環境用のライセンスでは、物理ホスト 1 台と、ホストされる仮想コンピュータ（数量は無制限）のバックアップが可能になります。

本製品をゲスト システムにインストールすることも、ホストからそれらのゲスト システムをバックアップすることも、両方の方法を組み合わせることもできます。Acronis Backup のエージェント（エージェント for Exchange、エージェント for SQL、エージェント for Active Directory など）は、追加ライセンスなしでインストールできます。

VMware vSphere または Microsoft Hyper-V クラスタの場合、クラスタ内にあるノードと同じ数のライセンスが必要です。

次の表は、必要なライセンスを仮想化プラットフォーム別にまとめたものです。

ライセンス名	仮想化プラットフォーム
Acronis Backup Advanced for VMware	VMware により開発された、サポートされているプラットフォームすべて（ESX、ESXi、VMware Workstation、VMware ACE）*

Acronis Backup Advanced for Hyper-V	Microsoft により開発された、サポートされているプラットフォームすべて (Hyper-V、Windows Virtual PC) *
Acronis Backup Advanced for RHEV	Red Hat Enterprise Virtualization Kernel-based Virtual Machine (KVM)
Acronis Backup Advanced for Citrix XenServer	Citrix XenServer
Acronis Backup Advanced for Oracle VM	Oracle VM Server Oracle VM VirtualBox
Acronis Backup Advanced Universal License	上記すべて Parallels Workstation Parallels Server Bare Metal

*サポートされている仮想化プラットフォームすべての一覧については、『Backing up virtual machines (仮想コンピュータのバックアップ)』ドキュメントの「Supported virtualization platforms (サポートされる仮想化プラットフォーム)」を参照してください。

1.5 サポートされるオペレーティング システム

管理対象のコンピュータのコンポーネント

重要: このサポートの詳細と制限事項については、「Windows 8 と Windows Server 2012 のサポート」を参照してください。

Acronis Backup エージェント for Windows

Acronis Backup Advanced for Windows Server

Acronis Backup Advanced for Hyper-V

Acronis Backup Advanced for VMware

Acronis Backup Advanced for Citrix XenServer

Acronis Backup Advanced for RHEV

Acronis Backup Advanced for Oracle VM

Acronis Backup Advanced Universal License

Windows XP Professional SP2 以降 (x86、x64)

Windows Server 2003 SP1+/2003 R2: Standard、Enterprise の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2003 SP1+/2003 R2

Windows Vista – Vista Home BasicおよびVista Home Premiumを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Datacenter、Web の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2008

Windows 7 – StarterおよびHome Editionを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation、Web の各エディション

Windows MultiPoint Server 2010/2011/2012

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows 8/8.1 – Windows RTエディションを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2012/2012 R2: すべてのエディション

Windows Storage Server 2003/2008/2008 R2/2012/2012 R2/2016

Windows 10 – Home、Pro、Education、Enterprise、IoT Enterpriseの各エディション

Windows Server 2016: Nano Server以外のすべてのインストールオプション

Acronis Backup for Windows Server Essentials

Windows Small Business Server 2003/2003 R2

Windows Small Business Server 2008

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows Server 2012/2012 R2: Essentials、Foundation の各エディション

Acronis Backup Advanced for PC

Windows XP Professional SP2 以降 (x86、x64)

Windows Vista – Vista Home BasicおよびVista Home Premiumを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows 7 – StarterおよびHome Editionを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows 8/8.1 – Windows RTエディションを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows 10 – Home、Pro、Education、Enterprise、IoT Enterpriseの各エディション

Acronis Backup エージェント for Exchange

Windows Server 2003/2003 R2: Standard、Enterprise の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2003/2003 R2

Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Datacenter の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2008

Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation の各エディション

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows Server 2012/2012 R2: Standard、Datacenter の各エディション

Windows Server 2016: Nano Server以外のすべてのインストールオプション

Acronis Backup エージェント for SQL

Windows Server 2003/2003 R2: Standard、Enterprise の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2003/2003 R2

Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Datacenter の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2008

Windows 7 – StarterおよびHome Editionを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation の各エディション

Windows MultiPoint Server 2010/2011/2012

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows 8/8.1 – Windows RTエディションを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2012/2012 R2: すべてのエディション

Windows Storage Server 2003/2008/2008 R2/2012/2012 R2/2016

Windows 10: Home、Pro、Education、Enterpriseの各エディション

Windows Server 2016: Nano Server以外のすべてのインストールオプション

Acronis Backup エージェント for Active Directory

Windows Server 2003/2003 R2: Standard、Enterprise の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2003/2003 R2

Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Datacenter の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2008

Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation の各エディション

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows Server 2012/2012 R2: すべてのエディション

Windows Server 2016: Nano Server以外のすべてのインストールオプション

Acronis Backup エージェント for Linux

Acronis Backup Advanced for Linux Server

Acronis Backup Advanced for Hyper-V

Acronis Backup Advanced for VMware

Acronis Backup Advanced for Citrix XenServer

Acronis Backup Advanced for RHEV

Acronis Backup Advanced for Oracle VM

Acronis Backup Advanced Universal License

2.4.20 ~ 4.15 のカーネルおよび glibc 2.3.2 以降を搭載した Linux

以下のx86 および x86_64 Linux ディストリビューション

Red Hat Enterprise Linux 4.x、 5.x、 6.x、 7.0、 7.1、 7.2、 7.3、 7.4

Ubuntu 9.10、 10.04、 10.10、 11.04、 11.10、 12.04、 12.10、 13.04、
13.10、 14.04、 14.10、 15.04、 15.10、 16.04、 16.10

Fedora 11、 12、 13、 14、 15、 16、 17、 18、 19、 20、 21、 22、 23、 24、 25、
26、 27

SUSE Linux Enterprise Server 10 および 11

SUSE Linux Enterprise Server 12 - ファイルシステムでサポート (Btrfs を除く)

Debian 4、 5、 6、 7.0、 7.2、 7.4、 7.5、 7.6、 7.7、 8.0、 8.1、 8.2、 8.3、 8.4、
8.5、 8.6

CentOS 5.x、 6.x、 7、 7.1、 7.2、 7.3、 7.4

Oracle Linux 5.x、 6.x、 7.0、 7.1、 7.2、 7.3、 7.4 - Unbreakable
Enterprise Kernel と Red Hat Compatible Kernel の両方

CloudLinux 6.x

ClearOS 5.x、 6.x、 7、 7.1

Astra Linux 1.5

RPM Package Managerを使用していないシステム (Ubuntuシステムなど) に製品をインストールする場合は、インストールの前に、ルートユーザーとして次のコマンドを実行するなどしてこのマネージャを手動でインストールする必要があります。

apt-get install rpm

Acronis Backup エージェント for Hyper-V

Windows Server 2008 (x64のみ) (Hyper-V使用)

Windows Server 2008 R2 (Hyper-V 使用)

Microsoft Hyper-V Server 2008/2008 R2

Windows Server 2012/2012 R2 with Hyper-V

Microsoft Hyper-V Server 2012/2012 R2

Windows Server 8、8.1 (x64のみ) (Hyper-V使用)

Windows 10 – Pro、Education、Enterpriseエディション (Hyper-V使用)

Windows Server 2016 with Hyper-V: Nano Server以外の全インストールオプション

Microsoft Hyper-V Server 2016

Acronis Backup エージェント for VMware (仮想アプライアンス)

このエージェントは、ESX(i) ホストで実行する仮想アプライアンスとして提供されます。

VMware ESX(i) 4.0、4.1、5.0、5.1、5.5、6.0、6.5

Acronis Backup エージェント for VMware (Windows)

このエージェントは、上記の Acronis Backup エージェント for Windows (Acronis Backup Advanced for VMware の下で) のオペレーティング システムで実行する Windows アプリケーションとして提供されます。

集中管理用のコンポーネント

Acronis Backup 管理サーバー、Acronis ライセンス サーバー、Acronis Backup ストレージ ノード

Windows XP Professional SP3 (x86、x64)

Windows Server 2003/2003 R2: StandardおよびEnterpriseエディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2003/2003 R2

Windows Vista – Vista Home BasicおよびVista Home Premiumを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Datacenter の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2008

Windows 7 – StarterおよびHome Editionを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation の各エディション

Windows MultiPoint Server 2010/2011/2012

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows 8/8.1 – Windows RTエディションを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2012/2012 R2: すべてのエディション

Windows Storage Server 2003/2008/2008 R2/2012/2012 R2/2016

Windows 10 – Home、Pro、Education、Enterprise、IoT Enterpriseの各エディション

Windows Server 2016: Nano Server以外のすべてのインストールオプション

Acronis Backup 管理コンソール

Windows XP Professional SP2 以降 (x86、x64)

Windows Server 2003/2003 R2: Standard、Enterprise の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2003/2003 R2

Windows Vista: すべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Datacenter、Web の各エディション (x86、x64)

Windows Small Business Server 2008

Windows 7: すべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation、Web の各エディション

Windows MultiPoint Server 2010/2011/2012

Windows Small Business Server 2011: すべてのエディション

Windows 8/8.1 – Windows RTエディションを除くすべてのエディション (x86、x64)

Windows Server 2012/2012 R2: すべてのエディション

Windows Storage Server 2003/2008/2008 R2/2012/2012 R2/2016

Windows 10 – Home、Pro、Education、Enterprise、IoT Enterpriseの各エディション

Windows Server 2016: Nano Server以外のすべてのインストールオプション

1.6 システム要件

オペレーティング システム内にインストールされるコンポーネント

必要なディスク領域の合計を計算するには、インストールを計画しているコンポーネントについて、表の 3 番目と 4 番目の列に指定されている値を加算します。

コンポーネント	メモリ (OS および実行中のアプリケーションに加えて必要な容量)	インストールまたはアップデートに必要なディスク領域	コンポーネントが使用するディスク領域	その他
Windows にインストールされるコンポーネント				
完全インストール	350 MB	5.8 GB	4.4 GB SQL Express Server を含む	
エージェント コア	140 MB	420 MB	270 MB	
エージェント for Windows	375 MB	1 GB	660 MB	
エージェント for VMware (Windows)	90 MB	140 MB	100 MB	
エージェント for Hyper-V	80 MB	60 MB	30 MB	
エージェント for Exchange	100 MB	170 MB	90 MB	
ブータブル メディア ビルド	370 MB	1.3 GB	880 MB	CD-RW または DVD-RW ドライブ

コンポーネント	メモリ (OS および実行中のアプリケーションに加えて必要な容量)	インストールまたはアップデートに必要なディスク領域	コンポーネントが使用するディスク領域	その他
管理コンソール	180 MB	490 MB	330 MB	画面解像度 800 x 600 ピクセル以上
管理サーバー (200 台までの管理対象コンピュータ)	350 MB	940 MB SQL Express Server 用に 490 MB	640 MB SQL Express Server 用に 260 MB	
管理サーバー (200 台を超える管理対象コンピュータ)	Acronis ナレッジ ベースの記事 http://kb.acronis.com/content/40678 (英語) を参照してください。			
Wake-on-LAN プロキシ	70 MB	40 MB	15 MB	
ストレージ ノード (一般的な要件)	180 MB	470 MB	290 MB テープ ライブラリを使用する場合、テープ データベース用に必要なディスク領域: 10 アーカイブごとに約 1 MB	
ストレージ ノード (重複除外を使用する場合の要件)	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 最低 8 GB の RAM。 ▪ 64 ビットのプラットフォーム。 詳細については、製品ヘルプまたはユーザー ガイドの「重複除外に関するベストプラクティス」を参照してください。			
ライセンス サーバー	65 MB	60 MB	40 MB	
PXE サーバー	80 MB	95 MB	60 MB	
トレイ モニタ	65 MB	25 MB	10 MB	

コンポーネント	メモリ (OS および実行中のアプリケーションに加えて必要な容量)	インストールまたはアップデートに必要なディスク領域	コンポーネントが使用するディスク領域	その他
Linux にインストールされるコンポーネント				
エージェント for Linux	120 MB	200 MB	210 MB	
ブータブル メディア ビルド	130 MB	300 MB	330 MB	
管理コンソール	120 MB	100 MB	200 MB	
VMware ESX(i) サーバーにインストールされるコンポーネント				
エージェント for VMware (仮想アプライアンス)	最小 1 GB OVF テンプレートの設定は 2 GB です。*	6 GB	6 GB	CPU 番号: 2 (デフォルトの仮想アプライアンス設定) 4 ~ 8 (5 ~ 10 の VM を同時にバックアップする場合に推奨) CPU 予約: 300 MHz 以上を推奨

*エージェントが管理サーバーから配置される場合、メモリ サイズは次のように自動的に設定されます。

- ホスト RAM が 16 GB 以下の場合、1 GB。
- ホスト RAM が 16 GB から 64 GB までの場合、2 GB。
- ホスト RAM が 64 GB を上回る場合、4 GB。

ネットワーク インターフェイス カードまたは仮想ネットワーク アダプタは、すべてのコンポーネントに必要です。

ブータブル メディア

メディアの種類	メモリ	ISO イメージ サイズ	その他
Windows PE ベース	1 GB	410 MB	
Linux ベース (32 ビット)	512 MB	130 MB	
Linux ベース (64 ビット)	1 GB	175 MB	

2 Acronis Backup Advanced のインストール

このセクションでは、製品のインストール時に生じることが予想される疑問点について説明します。

2.1 Windows でのインストール

ここでは、Windows を実行しているコンピュータに Acronis Backup コンポーネントをインストールする方法について説明します。

2.1.1 Windows におけるインストール方法

Acronis Backup Advanced の各コンポーネントは、さまざまな方法でインストールすることができます。ご使用の環境のサイズおよび構造に基づき、このセクションで説明するインストール方法のいずれかを選択してください。

複数のインストール方法を組み合わせることも可能です。たとえば、管理コンソールと管理サーバーの対話型インストールを実行してから、リモートでエージェントを複数のコンピュータにインストールすることができます。

対話型またはウェブ ベースのインストールを使用することによって、あらゆるコンポーネントをインストールすることが可能です。その他のインストール方法は、主に、エージェントをインストールするためのものです。

対話型インストール 『32ページ』

対話型インストールでは、自己完結型セットアップ プログラムを実行して、画面に表示される指示に従います。

利点: セットアップ プログラムに、Windows のすべてのコンポーネントが含まれています。

欠点: セットアップ プログラムのサイズが大きくなります。

使用例:

- 管理コンソール、管理サーバー、およびストレージ ノードをインストールできます。
- 少数のコンピュータにエージェントをインストールできます。

ウェブ ベースのインストール 『43ページ』

ウェブ ベースのインストールでは、軽量のセットアップ プログラムを実行して、画面に表示される指示に従います。インストールの対象として選択したコンポーネントのみがセットアップ プログラムによって Acronis のウェブサイトからダウンロードされます。

利点: セットアップ プログラムのサイズが小さくなります。

欠点: 同じデータがインターネット経由で大量に転送される可能性があります（たとえば、複数のコンピュータにエージェントをインストールする場合）。このような欠点を克服するには、ネットワーク フォルダにダウンロードされたインストール パッケージを保存 『43ページ』 します。

使用例: インターネットへアクセスが低速な小規模のネットワークでエージェントをインストールできます（Acronis のウェブサイトから大きなセットアップ プログラムをダウンロードする必要はありません）。

リモート インストール 『75ページ』

前提条件: 管理コンソールを事前にインストールしておく必要があります。

リモート インストールでは、複数のコンピュータにリモートでソフトウェアをインストールします。管理コンソールの [ようこそ] 画面から、または、管理サーバーにコンピュータを追加する際に実行できます。

利点: 管理者がインストールの実行を集中管理できます。エンド ユーザーが意識する必要はありません。

欠点: インストールの前に、インストール先のコンピュータで複数の準備手順 『77ページ』 を実行する必要があります。

使用例:

- ローカル ネットワーク内の多数のコンピュータにエージェントをインストールできます。
- エージェントが存在しないコンピュータを管理サーバーに追加できます。

無人インストール 『44ページ』

無人インストールでは、コマンドライン パラメータを指定してインストール パッケージ (.msi ファイル) を実行します。

利点: インストールを、スクリプトによって実行できます。

欠点: インストールの設定の難易度が高くなります (トランスフォーム、つまり .mst ファイルの作成が必要になる場合があります) 。

使用例: Windows を稼動している多数のコンピュータにエージェントをインストールします。

グループ ポリシーを使用したインストール 『48ページ』

グループ ポリシーを使用したインストールでは、グループ ポリシーを使用することによって、Active Directory ドメインにインストール パッケージ (.msi ファイル) を配置します。

利点: ドメイン全体で管理者が集中的にインストールを実行できます。インストールはシステム アカウントで実行されます。エンド ユーザーが意識する必要はありません。

欠点: インストールの設定の難易度が高くなります (トランスフォーム、つまり .mst ファイルの作成が必要になる場合があります) 。コンピュータがドメイン内に存在している必要があります。

使用例: Active Directory ドメイン内の多数のコンピュータにエージェントをインストールします。

管理サーバーのウェブ ページからのインストール 『57ページ』

前提条件: 管理サーバーを事前にインストールしておく必要があります。

管理サーバーのウェブ ページからのインストールでは、管理サーバーのウェブ ページに移動してソフトウェアをインストールします。インストール設定を指定する必要はありません。

利点:

- サポート対象のウェブ ブラウザを搭載したコンピュータであれば、エンド ユーザーはどのコンピュータでもインストールを実行できます。
- コンポーネントが、インターネット経由ではなく、ローカル ネットワークからダウンロードされます。
- エンド ユーザーは、インストール設定を指定する必要がありません。
- コンピュータを、管理サーバーに自動的に登録できます。

欠点: コンピュータにソフトウェアをインストールする権限がエンド ユーザーに必要です（そのコンピュータに対するローカル管理者であるなど）。

使用例:

- （企業のネットワークに不定期に接続する可能性がある）ラップトップ ユーザーが自分のラップトップにプログラムをインストールできるようにします。
- フォルダの共有が許可されていないネットワーク内のインストール パッケージにアクセスできます。

2.1.2 ローカル インストール

すべてのコンピュータを含むセットアップ プログラムと、選択したコンポーネントのみを Acronis Web サイトからダウンロードする簡易セットアップ プログラムのどちらかを選択することができます。

インストールは、対話型モードまたは無人モードで実行できます。

2.1.2.1 準備

ネットワーク ポート:Acronis Backup では、ローカルのインストールおよびコンポーネント間の通信に TCP ポート **9876** を使用します。このポートは、セットアップ プログラムにより Windows ファイアウォールを経由して自動的に開かれます。別のファイアウォールを使用している場合は、そのファイアウォール経由の受信要求と送信要求の両方に対して必ずこのポートを開いてください。

暗号化ソフトウェア:PGP Whole Disk Encryption などのディスクレベルの暗号化ソフトウェアを使用する予定がある場合は、必ずそのソフトウェアを Acronis Backup のインストール前にインストールしてください。

2.1.2.2 Acronis Backup Advanced の対話型インストール

Acronis Backup Advanced は、標準インストールまたはカスタム インストールでローカル コンピュータにインストールできます。**[標準インストール]** は、製品をインストールする最も簡単な方法です。インストール パラメータの多くは、デフォルト値に設定されます。**[カスタム インストール]** では、インストールするコンポーネントを選択して、その他のパラメータを指定できます。

注意: インストール手順をキャンセルすると、最後のパッケージのみが削除されます。他のコンポーネントがある場合は、インストールされたままになります。

標準インストール

1. 管理者としてログオンし、Acronis Backup Advanced セットアップ プログラムを起動します。
2. **[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
3. 使用許諾契約の内容に同意します。
4. このコンピュータで実行する処理に応じて、1 つ以上のコンピュータの役割を選択します。

この選択に基づいて、Acronis Backup の対応するコンポーネント 『36ページ』がインストール対象として選択されます。

5. コンピュータ データのバックアップを選択しており、Acronis Backup でバックアップできるアプリケーションがコンピュータに含まれている場合、アプリケーション特有のバックアップで保護するアプリケーションを選択します。
選択に応じて、エージェント for Exchange またはエージェント for Hyper-V など、その他のコンポーネントがインストール対象として選択されます。
6. メッセージが表示されたら、選択したコンポーネントに応じて次のパラメータを 1 つ以上指定します。
 - インストールの種類（試用または完全） 『35ページ』。
 - コンポーネントを管理サーバーに登録するかどうか 『41ページ』。
 - コンピュータにインストールされている Microsoft SQL Server インスタンスの資格情報 『99ページ』。
 - コンピュータを Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム (CEP) に参加させるかどうか。
7. 概要ウィンドウで、インストールされるコンポーネントの一覧およびそれらのコンポーネントのインストール設定を確認します。**[インストール]** をクリックすると、インストールが開始します。

カスタム インストール

1. 管理者としてログオンし、Acronis Backup Advanced セットアップ プログラムを起動します。
2. **[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
3. 使用許諾契約の内容に同意します。
4. **[Acronis コンポーネントを手動で選択し、インストール処理をカスタマイズする]** チェック ボックスをオンにします。
また、コンピュータで実行する操作に応じて、コンピュータの役割を 1 つ以上選択することもできます。この選択に応じて、Acronis Backup の対応するコンポーネント 『36ページ』 がインストール対象として選択済みになります。
5. (オプション) コンポーネント ツリーで、その他のコンポーネントを選択するか、インストールしないコンポーネントの選択をオフにします。

ヒント: エージェント for VMware (Windows) 、Wake-On-LAN プロキシ、およびサイズが小さい一部の機能は、コンポーネント ツリーを使用するだけでインストールできます。

インストール ファイルは約 900 MB のディスク容量を使用するので、管理コンソールをインストールするたびにファイルが保存されないように **[リモート インストールのコンポーネント]** を無効にすることができます。

6. メッセージが表示されたら、選択したコンポーネントに応じて次のパラメータを 1 つ以上指定します。

- インストールの種類 (試用または完全) 『35ページ』。
- エージェント for VMware (Windows) で使用するライセンス サーバーの名前または IP アドレス。
- 製品のインストール先フォルダ。
- 製品をすべてのユーザー用にインストールするか現在のユーザー用にのみインストールするか指定します。
- Acronis サービスの資格情報 『38ページ』。デフォルトでは、セットアップ プログラムによってサービスごとに専用のユーザー アカウントが作成されます。
- Acronis Backup 管理サーバーで使用する Microsoft SQL Server の名前 『40ページ』。
- コンポーネントを管理サーバーに登録するかどうか 『41ページ』。
- コンピュータにリモートから接続できるユーザーの名前 『42ページ』。
- エージェント for VMware (Windows) によって仮想コンピュータがバックアップされる VMware vCenter Server または ESX(i) サーバーの名前または IP アドレス。そのサーバーにログオンするためのユーザー名とパスワードを指定します。サーバーを指定しない場合は、**[後でサーバーを指定する]** をクリックします。

エージェントをインストールした後にこの設定にアクセスするには、エージェントがインストールされているコンピュータにコンソールを接続し、トップ メニューから **[オプション]** > **[コンピュータ オプション]** > **[エージェント for VMware]** を選択します。

- 管理サーバー ウェブ ページを有効にするかどうか (有効にした場合は、ウェブ ページのポートを指定します) 。 『57ページ』

- コンピュータにインストールされている Microsoft SQL Server インスタンスの資格情報 『99ページ 』 .
 - コンピュータを Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム (CEP) に参加させるかどうか。
7. 概要ウィンドウで、インストールされるコンポーネントの一覧およびそれらのコンポーネントのインストール設定を確認します。[インストール] をクリックすると、インストールが開始します。

インストールの種類

エージェントをインストールするときには、プロダクト キーまたはクラウド バックアップ サブスクリプションがある場合は、完全インストール モードを選択します。いずれもない場合は、試用モードを選択します。

試用モードでのインストール

- 標準インストール中に次の手順を実行します。[無料の試用版の開始を希望します] を選択します。
- カスタム インストールの場合: [...のバックアップのライセンス] で [試用モード] を選択してから、[次へ] をクリックします。

試用モード 『4ページ 』 で製品がインストールされます。

完全モードでのインストール

1. (標準インストールのみの場合) [ライセンスまたはサブスクリプションを購入しました] を選択し、[次へ] をクリックします。
2. プロダクト キーがある場合、ライセンス サーバーからライセンスを取得するか、コンピュータでローカルに保存するかどうかを選択します。それ以外の場合は、この手順をスキップします。
 - **ライセンス サーバーからライセンスを取得するには、[次のライセンス サーバーを使用]** チェック ボックスをオンにしてから、ライセンス サーバーの名前または IP アドレスを指定します。ライセンス サーバーに必要なプロダクト キーがない場合、プロダクト キーを入力するか、テキスト ファイルからプロダクト キーをインポートします。

既に別のライセンス サーバーがある場合を除き、管理サーバーをライセンス サーバーに指定することをお勧めします。管理サーバーがインストールされている場合、ローカル コンピュータがデフォルトで選択されます。

- **コンピュータ自体にコンピュータのライセンスを保存するには**、ライセンス サーバーが選択されていないことを確認します。ライセンス サーバーが選択されていた場合は、**[次のライセンス サーバーを使用]** チェックボックスをオフにします。その後、プロダクト キーを入力するか、テキスト ファイルからプロダクト キーをインポートします。

3. クラウド バックアップ サブスクリプションがない場合、既にサブスクリプションを登録した場合、またはコンピュータがインターネットに接続されていない場合は、この手順を省略します。

それ以外の場合は、以下の手順を実行します。

- a. サブスクリプション登録コードを入力するか、テキスト ファイルからインポートします。サブスクリプション キーを Acronis License Server にインポートしないでください。
- b. Acronis アカウント資格情報を入力します。Acronis アカウントがない場合は、**[アカウントの作成]** をクリックして、アカウント作成フォームを入力します。

4. 手順 2 および 3 を省略した場合は、**[...のバックアップのライセンス]**で **[クラウド バックアップのみ: ライセンスは不要です]** を選択します。
5. ライセンス サーバー（または入力した一連のライセンス）に複数の製品のライセンスが含まれている場合、インストールする製品を選択します。デフォルトでは、コンピュータのオペレーティング システムに適用可能な最も低コストのライセンスが選択されます。
6. **[...のバックアップのライセンス]** セクションのいずれかでライセンスが不足している場合、**[戻る]** をクリックし、手順 2 の説明に従って必要なライセンスを追加します。

標準インストールでインストールされるコンポーネント

標準インストールをコンピュータで実行するとき、コンピュータに割り当てる役割を選択します。以下の選択に基づいて、Acronis Backup のコンポーネントがインストールされます。

- **このコンピュータのデータをバックアップする**

- エージェント コア
- エージェント（コンピュータに存在するデータの種類によって異なります）：
 - エージェント for Windows
 - エージェント for Exchange
 - エージェント for SQL
 - エージェント for Active Directory
 - エージェント for Hyper-V
- 管理コンソール
- コマンドライン ツール
- **[物理コンピュータと仮想コンピュータのバックアップを集中的に監視および構成する]**。
 - 管理サーバー
 - 管理コンソール
 - リモート インストールのコンポーネント*
 - コマンドライン ツール
 - ライセンス サーバー
- **他のコンピュータのバックアップをこのコンピュータに保存する**
 - ストレージ ノード
 - コマンドライン ツール
- **リモート コンピュータに接続する**
 - 管理コンソール
 - ブータブル メディア ビルダ
 - リモート インストールのコンポーネント*
 - コマンドライン ツール

* このコンポーネントは、セットアップ ファイルがローカル フォルダに置かれている場合にのみインストールされます。

Acronis サービスのログイン情報の指定

Acronis Backup エージェント、Acronis Backup 管理サーバー、および Acronis Backup ストレージ ノードの各 Acronis Backup コンポーネントは、サービスとして実行されます。コンポーネントのインストール時に、コンポーネントのサービスを実行するアカウントを指定する必要があります。

コンピュータにインストールされたすべての Acronis Backup エージェントは、共通の Acronis Managed Machine Service (**エージェント サービス**) を使用します。

それぞれのサービスに対して、新しいユーザー アカウントを作成するか、ローカルまたはドメイン ユーザーの既存のアカウントを指定するか、選択できます。たとえば、**¥LocalUser** または **DomainName¥DomainUser** のように指定します。

デフォルトでは、セットアップ プログラムによってサービスごとに新しい専用のユーザー アカウントが作成されます。

どういった場合に既存のアカウントを考慮するか

新しいアカウントはほとんどの場合に適合します。既存のアカウントを考慮するのは、次のような場合です。

- コンピュータが Active Directory ドメインの**ドメイン コントローラ**である。
それぞれのサービスに既存のアカウント（または同じアカウント）を指定する必要がある。セキュリティ上の理由で、セットアップ プログラムはドメイン コントローラでは新しいアカウントを自動作成しません。
- **フェールオーバー クラスタ ノード**にエージェントをインストールしている。
Hyper-V クラスタ ノードや Microsoft Exchange Server のクラスタ ノードなどのフェールオーバー クラスタ ノードにエージェントをインストールする場合、エージェント サービスについては、ドメイン ユーザーの既存のアカウントを指定します。このアカウントは、各クラスタ ノードに対する管理権限が必要です。エージェントは、このアカウントを使用して、いかなるノードにあるクラスタ化されたリソースにでもアクセスできます。また、このエージェントに新しいアカウントを作成することもできます。その後、集中管理用バックアップ計画または復元タスクを作成するときに、必要な権限を持つドメイン アカウントに対するログイン情報を指定する必要があります。

- 管理サーバーが**既存の Microsoft SQL サーバー**を使用するように設定する必要があります。

管理サーバーと SQL サーバーが異なるコンピュータにインストールされていて、SQL サーバーに Windows 認証を使用する場合、管理サーバー サービスの既存のアカウントを指定します。詳細については、「Microsoft SQL サーバーの指定 『40ページ 』」を参照してください。

アカウントの権限

既存のアカウントと新しく作成されたアカウントの両方に、次の権限が付与されます。

- **エージェント サービスとストレージ ノード サービス**のアカウントは、**Backup Operators** グループに含まれます。

エージェント サービスとストレージ ノード サービスの新規作成アカウントは、**Administrators** グループに含まれます。**ストレージ ノード サービス**の既存のアカウントを指定する場合、**Administrators** グループのメンバのアカウントをお勧めします。メンバでない場合、サービスが一部の Windows リソースにアクセスする権限が不足する可能性があります。セキュリティ上の理由から、セットアップ プログラムでは、既存のアカウントを **Administrators** グループに自動的に含めることはありません。

- **管理サーバー サービス**のアカウントは、**Acronis Centralized Admins** グループに含まれます。
- これらの 3 つのアカウントすべてに、**サービスとしてログオン**のユーザー権限が割り当てられます。
- 3 つのアカウントすべてに、フォルダ **%PROGRAMDATA%\Acronis** (Windows XP および Server 2003、**%ALLUSERSPROFILE%\Application Data\Acronis**) およびそのサブフォルダで **[フル コントロール]** 権限が付与されます。
- この 3 つのアカウントのそれぞれは、**HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Acronis** キーのレジストリ キーに対する **[フル コントロール]** 権限を付与されます。
- **エージェント サービス**のアカウントには、**プロセスのメモリ クォータの増加**、および **プロセス レベル トークンの置き換え**および**ファームウェアの環境値の修正**のユーザー権限が割り当てられます。

高度な使用に関するヒント

- エージェント サービス、管理サーバー サービス、およびストレージ ノード サービスの新しいアカウントの名前は、それぞれ **Acronis Agent User**、**AMS User**、および **ASN User** になります。
- コンピュータが Active Directory ドメインの一部である場合は、ここで説明した既存のアカウントまたは新規に作成されたアカウントへの上記のユーザー権限の付与がドメインのセキュリティ ポリシーによって妨げられないようにしてください。
- インストール後は、コンポーネントのサービスに別のアカウントを指定しないでください。そうしなければ、コンポーネントが動作を停止する可能性があります。別のアカウントを指定する必要がある場合は、新しいアカウントに上記の権限が付与されることを確認してください。

Microsoft SQL Server の指定

Acronis Backup 管理サーバーのインストール時に、管理サーバーが使用する Microsoft SQL Server を指定する必要があります。

- **運用 SQL Server** は、Acronis Backup コンポーネントを確実に同期します。これには、頻繁に変更される処理データのデータベースが保存されます。したがって、管理サーバーと同じコンピュータに常駐させることをお勧めします。
- **レポート用 SQL Server** は操作ログと統計データを保存します。このサーバーに保存されるデータベースは、時間が経過するとかなり大きくなる場合があります。レポート用 SQL Server を運用 SQL Server と同じサーバーにしたり、別のサーバーとして同じコンピュータにインストールしたり、別のコンピュータ上の別のサーバーにしたりすることが可能です。

デフォルトでは、Microsoft SQL Server 2008 Express の新しいインスタンスがコンピュータにインストールされ、運用 SQL Server とレポート用 SQL Server の両方として使用されます。インスタンスの名前は **ACRONIS** です。別の名前を使用する場合は **[変更]** をクリックするか、既存の SQL Server インスタンスを選択します。

既存の SQL Server インスタンスの選択

Microsoft SQL Server 2005、Microsoft SQL Server 2008/2008 R2、Microsoft SQL Server 2012、Microsoft SQL Server 2014、または Microsoft SQL Server 2016 のどの

エディションでも選択できます。選択したインスタンスは他のプログラムでも使用できます。

別のコンピュータにインストールされているインスタンスを選択する前に、SQL Server Browser サービスと TCP/IP プロトコルがそのコンピュータで有効になっていることを確認してください。SQL Server Browser サービスを開始する手順については、<http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms189093.aspx> を参照してください。同様の手順を使用して、TCP/IP プロトコルを有効にすることができます。

インスタンス名: MachineName¥InstanceName の形式でインスタンス名を指定します。たとえば、**dbserver¥MyDatabases** と指定します。コンピュータにインストールされている SQL Server が 1 つだけの場合は、コンピュータ名だけを指定します。

認証: 管理サーバーが SQL Server と接続するために Windows 認証と SQL Server 認証のどちらを使用するかを選択します。

- **[Windows 認証]** (セキュリティが強化されているため Microsoft によって推奨されている) を選択した場合、管理サーバーは管理サーバー サービス 『38ページ』のアカウントを使用して接続します。

SQL Server と管理サーバーが別のコンピュータにインストールされている場合、そのアカウントについて次の項目を確認します。

- 両方のコンピュータに存在する。たとえば、ドメイン ユーザー アカウントにします。
- SQL Server にデータベースを作成する権限がある。これを簡単に保障する方法は、SQL Server のコンピュータの **Administrators** グループにそのアカウントを所属させてから、インストールを続行することです。インストールが完了したら、このグループからアカウントを削除します。
- **[SQL Server 認証]** を選択した場合は、SQL Server にデータベースを作成する権限を持つ SQL Server ログイン アカウントのログイン名とパスワードを指定します。

管理サーバーへのコンポーネントの登録

Acronis Backup エージェントまたは Acronis Backup ストレージ ノードをインストールする場合は、これらのコンポーネントを Acronis Backup 管理サーバーに登録するかどうかを指定する必要があります。

エージェントを管理サーバーに登録すると、管理サーバーの管理者はコンピュータを集中管理できるようになります。このようなコンピュータは、登録済みのコンピュータと呼ばれます。後で別のエージェントをインストールする場合は、そのエージェントを登録する必要はありません。

ストレージ ノードを管理サーバーに登録すると、登録済みのコンピュータのデータをストレージ ノードの集中管理用格納域にバックアップしたり、集中管理用格納域から復元したりできるようになります。

インストール時にエージェントやストレージ ノードに登録する手順 (推奨) は、次のとおりです。

1. **[今すぐ登録する]** をクリックします。
2. 管理サーバーがインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスを指定します。このコンピュータはオンラインである必要があります。たとえば、管理サーバーがインストール中のコンポーネントに含まれている場合は、ローカル コンピュータを指定できます。
3. 管理サーバーのコンピュータの Acronis Centralized Admins グループのメンバであるユーザーのユーザー名とパスワードを指定します。管理サーバーをローカル コンピュータにインストールしている場合は、Administrators グループのメンバであるユーザーのユーザー名とパスワードを指定します。

登録をスキップする手順は、次のとおりです。

- **[後でコンピュータを登録する]** (または **[後でコンポーネントを登録する]**) をクリックします。

インストール後は、管理サーバーのインターフェイスから管理サーバー上のコンポーネントの登録や削除を行うことができます。

リモートから接続できるユーザーの指定

エージェントまたは管理サーバー (または両方) をインストールする場合、Acronis Backup 管理コンソールを使用して、リモートによるコンピュータの管理を許可したいユーザーの一覧を指定する必要があります。

デフォルトでは、そのコンピュータの Administrators グループのすべてのメンバが一覧に含まれます。コンピュータが Active Directory ドメインに含まれている場合は、ドメイン管理者も含まれることに注意してください。

セットアップ プログラムによって **Acronis Remote Users** グループが作成され、一覧に含まれるユーザーがグループに追加されます。グループのメンバを追加または削除することにより、コンピュータにリモート接続できるユーザーが追加または削除されます。

2.1.2.3 ウェブ ベースのインストール

ウェブ ベースのインストールの手順は、対話型インストール 『32ページ』の手順とまったく同じです。ウェブ ベースのインストールを使用できるのは、Acronis Backup Advanced のみです。

ウェブ ベースのインストール中に Acronis のウェブサイトからダウンロードされるのは、現在インストール中のコンポーネントのみです。後にこのコンピュータからリモートで 『75ページ』コンポーネントをインストールすることを計画している場合は、注意してください。リモートでインストールするコンポーネントがすべて確実にコンピュータ上に存在するためには、代わりにローカル インストールを使用することを検討してください。

多数のコンピュータでウェブ ベースのインストールを実行する場合、インターネットから同じコンポーネントを何度もダウンロードしないようにします。これを行うための手順は、次のとおりです。

1. ローカル ネットワークで、共有フォルダを作成し、Acronis Backup をインストールするすべてのコンピュータから使用できるようにします。
2. これらのコンピュータのうち、最初のコンピュータで、次の手順を実行します。
 - a. ウェブ ベースのインストールのセットアップ プログラムを実行します。
 - b. コンピュータの役割を選択する際、**[Acronis コンポーネントを手動で選択し...]** チェックボックスをオンにします。
 - c. コンポーネントのインストール先を選択する際、**[ダウンロードしたインストール ファイルを保存します]** チェックボックスをオンにしてから、作成した共有フォルダを指定します。
 - d. インストールを続けます。

必要なインストール パッケージが共有フォルダにダウンロードされます。

3. 残りのコンピュータで手順 2 を繰り返します。セットアップ プログラムによって、インストール ファイルが再度ダウンロードされずに共有フォルダにすでに存在しているファイルが再使用されます。他の必要なインストール ファイルはすべて、フォルダにダウンロードされます。

2.1.2.4 無人インストール

Acronis Backup エージェント for Windows などの Acronis Backup のコンポーネントは、対話型モードだけでなく、無人モードでインストールすることができます。

このセクションでは、Windows インストーラ (`msiexec` プログラム) を使用した無人インストールとアップデートについて説明します。Active Directory ドメインでは、グループポリシーを使用して、サポートされているコンポーネントの無人インストールまたはアップデートを行う方法があります。詳細については、「グループ ポリシーを使用したエージェントのインストール 『48ページ 』」を参照してください。

トランスフォーム (.mst ファイル) と呼ばれるファイルを必要とするコンポーネントもあります。他のコンポーネントではトランスフォームの使用はオプションです。

次の表に、無人モードでインストールまたはアップデートできるコンポーネントと機能を示します。

	コンポーネント名	msi ファイル名	トランスフォームの必要性
エージェント コア (どのようなエージェントでも必須)	エージェント コア	AcronisAgentCore.msi	+
エージェント	エージェント for Windows 『8ページ 』	AcronisAgentWindows.msi	+
	エージェント for VMware (Windows) 『10ページ 』	AcronisAgentESX.msi	+

	コンポーネント名	msi ファイル名	トランスフォームの必要性
	エージェント for Hyper-V 『10ページ』	AcronisAgentHyperV.msi	+
エージェント for Windows の機能	エージェント for Exchange 『11ページ』	AcronisRecoveryMsExchangeAgent.msi	+
	エージェント for SQL 『11ページ』	AcronisAgentMsSqlSinglePass.msi	+
	エージェント for Active Directory 『12ページ』	AcronisAgentADSinglePass.msi	+
メディアビルダ	ブータブル メディア ビルダ 『15ページ』	AcronisBootableComponentsMediaBuilder.msi	-
管理コンソール	管理コンソール 『15ページ』	AcronisManagementConsole.msi	-

準備

コンポーネントで使用されるトランスフォームを作成するには、コンフィギュレーションスクリプト `mst_gen.vbs` が必要です。

このスクリプトは、Acronis Backup 管理コンソールがインストールされているフォルダにあります。デフォルトのフォルダパス:

- `%ProgramFiles%\Acronis\BackupAndRecoveryConsole` 32 ビット Windows の場合
- `%ProgramFiles(x86)%\Acronis\BackupAndRecoveryConsole` 64 ビット Windows の場合

管理コンソールが別のコンピュータにインストールされている場合には、そのコンピュータからスクリプトをコピーできます。また、このセクション後半にある「トランスフォームの作成例」も参照してください。

エージェントのインストール順序

このエージェントをインストールする場合、まず、エージェント コア コンポーネント（まだインストールされていない場合）、次にエージェント自体、最後にエージェント機能をインストールします。

インストール手順

コンポーネントを無人モードでインストールまたはアップデートする手順は、次のとおりです。

1. セットアップ プログラムを開始します。
2. **[インストール ファイルの取り出し]**（標準のセットアップ プログラムを使用する場合）または **[インストール ファイルの保存]**（ウェブ ベースのセットアップ プログラムを使用する場合）をクリックします。
3. コンポーネントのインストール パッケージを取り出します。
4. トランスフォームを使用するコンポーネントをインストールする場合、コンフィギュレーション スクリプトを実行して、トランスフォームを作成します。それ以外の場合は、この手順をスキップします。

たとえば、次のコマンドは、プロダクト キー ABCDE-54321 を使用してエージェント for Windows をインストールするトランスフォームを作成します。

```
mst_gen.vbs /msi_path C:\AcronisAgentWindows.msi /serial ABCDE-54321
```

このセクションの後述の例をご参照ください。コンフィギュレーション スクリプトの構文の詳細は、「コンフィギュレーション スクリプトのパラメータ 『53ページ』」をご参照ください。

5. 次のいずれかの方法を使用して、コンポーネントをインストールまたはアップデートします。

- コンポーネントをインストールする場合、次のように Windows インストーラ（**msiexec** プログラム）を実行します。

トランスフォームを必要とするコンポーネント（この例では、エージェント for Windows）をインストールする場合：

```
msiexec /i c:\AcronisAgentWindows.msi TRANSFORMS=AcronisAgentWindows.mst /qb
```

それ以外の場合（この例では、管理コンソールをインストール）：

```
msiexec /i c:\AcronisManagementConsole.msi /qb
```

- コンポーネントをアップデートする場合は、次のように Windows Installer を実行します。

トランスフォームを必要とするコンポーネント（この例では、エージェント for Windows）をアップデートする場合:

```
msiexec /i C:\AcronisAgentWindows.msi TRANSFORMS=C:\AcronisAgentWindows.mst  
ADDLOCAL=ALL /qb
```

それ以外の場合（この例では、管理コンソールをアップデート）:

```
msiexec /i C:\AcronisManagementConsole.msi ADDLOCAL=ALL /qb /!*v C:\log.log
```

トランスフォームの作成例

エージェント コア用トランスフォーム。 次のコマンドでは、エージェント コア コンポーネントのインストール パッケージ用トランスフォームが作成されます。

```
mst_gen.vbs /msi_path C:\AcronisAgentCore.msi /account mydomain\agentuser MyPassWd  
/ams_address managementsrv /ams_user adminname AdminPassWd
```

このトランスフォームを無人インストールすると、次のようになります。

- エージェントのサービスは、**mydomain** ドメインの **agentuser** ドメイン ユーザー アカウント（パスワードは **MyPassWd**）で実行されます。
- エージェントが、**managementsrv** コンピュータにインストールされている Acronis Backup 管理サーバーに登録されます。**adminname** と **AdminPassWd** には、管理サーバーの管理者のユーザー名とパスワードをそれぞれ指定します。

エージェント for Windows 用トランスフォーム。 次のコマンドでは、エージェント for Windows のインストール パッケージ用トランスフォームが作成されます。

```
mst_gen.vbs /msi_path C:\AcronisAgentWindows.msi /license_server licensesrv  
/product AS
```

このトランスフォームを無人インストールすると、次のようになります。

- エージェントは、**licensesrv** コンピュータにインストールされているライセンス サーバーから Acronis Backup Advanced for Windows Server のライセンスを取得して使用します。

同様に、エージェント機能用トランスフォームを作成できます。

2.1.2.5 アップデート

Acronis Backup コンポーネントを 1 つ以上アップデートする手順は、次のとおりです。

1. アップデートされたバージョンの Acronis Backup のセットアップ プログラムを実行します。
2. **[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
3. **[アップデート]** をクリックします。
4. メッセージが表示されたら、プロダクト キーを手動で入力するかライセンス サーバーを指定することでプロダクト キーを指定します。
5. 画面の指示に従います。

無人モードでのコンポーネントのアップデート

無人モードでコンポーネントをアップデートする詳細については、「無人インストール 『44 ページ 』」を参照してください。

2.1.3 グループ ポリシーを使用したエージェントのインストール

グループ ポリシーを使用して、Acronis Backup エージェント for Windows を Active Directory ドメインのメンバに集中的にインストール（またはデプロイ）できます。

このセクションでは、グループ ポリシー オブジェクトを設定して、ドメイン全体またはその組織単位（OU）のコンピュータに Acronis Backup エージェント for Windows をデプロイする方法について説明します。

コンピュータがドメインにログオンするたびに、適用されるグループ ポリシー オブジェクトによって、そのコンピュータにエージェントが確実にインストールされます。

2.1.3.1 前提条件

エージェントの配置に進む前に、次の項目を確認します。

- Active Directory ドメインと、Microsoft Windows Server 2003 以降を実行しているドメイン コントローラがある。
- ドメインの Domain Admins グループのメンバである。
- プロダクト キーを把握しているか、Acronis ライセンス サーバーがインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスを把握している。

- Acronis Backup 管理コンソールがインストールされた Windows を実行するコンピュータがある。

2.1.3.2 エージェントの配置の準備

手順 1: インストール パッケージの取り出し

インストール パッケージ (.msi ファイルとして提供されます) を保存する共有フォルダを作成し、そこにパッケージを取り出す必要があります。

1. ドメイン コントローラ (またはドメイン内の任意のコンピュータ) にフォルダ (**D:¥Acronis** など) を作成します。
2. Acronis Backup セットアップ プログラムを開始します。
3. **[インストール ファイルの取り出し]** をクリックします。
4. **[エージェント for Windows (AcronisAgentWindows.msi)]** および **[エージェント コア (AcronisAgentCore.msi)]** チェックボックスをオンにします。
5. **[取り出し先]** に、作成したフォルダの名前を入力するか、**[参照]** をクリックしてフォルダを選択します。
6. **[取り出し]** をクリックします。
7. インストール パッケージを置いたフォルダを共有します。共有フォルダにドメイン ユーザーがアクセスできるようにします。たとえば、デフォルトの共有設定を **[Everyone]** のままにします。

手順 2: インストール パッケージの設定

重要: エージェントを再インストールまたはアップデートする場合は、この手順をスキップしてください。

コンフィギュレーション スクリプトを実行して、エージェント コア、およびエージェント for Windows コンポーネントのインストール パッケージを設定する必要があります。このスクリプトは、管理コンソールと共にインストールされます。デフォルトでは、このスクリプトは **%ProgramFiles%¥Acronis¥BackupAndRecoveryConsole** または **%ProgramFiles(x86)%¥Acronis¥BackupAndRecoveryConsole** フォルダにあります。管理コンソールが別のコンピュータにインストールされている場合には、そのコンピュータからコンフィギュレーション スクリプトをコピーできます。

このコンフィギュレーション スクリプトにより、インストール パッケージのトランスフォーム（変更、変更ファイル、または .mst ファイルとも呼ばれます）を作成します。

1. **[スタート]** メニューで、**[ファイル名を指定して実行]** をクリックし、「**cmd**」と入力します。
2. **[OK]** をクリックします。
3. 次のコマンドを実行して、現在のフォルダをコンフィギュレーション スクリプト **mst_gen.vbs** が存在するフォルダに変更します。

```
C:  
cd "C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecoveryConsole"
```

4. エージェント コア、およびエージェント for Windows コンポーネント用のコンフィギュレーション スクリプトを実行します。たとえば、次のようにします。

```
mst_gen.vbs /msi_path D:\Acronis\AcronisAgentCore.msi  
  
mst_gen.vbs /msi_path D:\Acronis\AcronisAgentWindows.msi /license_server  
licensesrv /product AS
```

注意: インストール パッケージがコンフィギュレーション スクリプトと同じフォルダにある場合でも、インストール パッケージへの完全なパスを含める必要があります。

コンフィギュレーション スクリプトの構文の詳細については、「コンフィギュレーション スクリプトのパラメータ 『53ページ 』」を参照してください。また、「無人インストール 『44ページ 』」の「トランスフォームの作成例」も参照してください。

インストール パッケージの配置準備が整いました。ここで、グループ ポリシー オブジェクトを作成する必要があります。「グループ ポリシー オブジェクトの設定 『50ページ 』」を参照してください。

2.1.3.3 グループ ポリシー オブジェクトの設定

ドメイン全体またはドメインの組織単位 (OU) にエージェントデプロイ用のグループ ポリシー オブジェクト (GPO) を設定する手順は、次のとおりです。エージェントは、ドメインまたは組織単位 (OU) のメンバーである各コンピュータで Windows が起動すると直ちにそのコンピュータインストールされます。

前提条件

- ドメイン管理者としてドメイン コントローラにログオンする。ドメインに複数のドメイン コントローラがあるときは、ドメイン管理者としていずれかのドメインにログオンします。
- ある組織単位 (OU) へのエージェントのデプロイを計画している場合は、その組織単位 (OU) がドメイン内に存在しているようにする。
- 「エージェントのデプロイの準備 『49ページ 』」で説明した手順を完了してください。

手順 1: グループ ポリシー オブジェクトの作成

1. [スタート] メニューで、[管理ツール] をポイントしてから、[Active Directory ユーザーとコンピュータ] (Windows Server 2003) または [グループ ポリシーの管理] (Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016) をクリックします。

2. Windows Server 2003 の場合:

- ドメイン名または組織単位 (OU) 名を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。ダイアログ ボックスで、[グループ ポリシー] タブをクリックし、[新規] をクリックします。

Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016:

- ドメイン名または組織単位 (OU) 名を右クリックし、[このドメインに GPO を作成し、このコンテナにリンクする] をクリックします。

3. 新しいグループ ポリシー オブジェクトに **Acronis エージェント**という名前を付けます。
4. 同様に別のグループ ポリシー オブジェクトを **Acronis コア**という名前で作成します。
5. 一覧内で **Acronis エージェント** オブジェクトが **Acronis コア** オブジェクトより上位にあることを確認します。

手順 2: エージェントのグループ ポリシー オブジェクトの設定

1. **Acronis エージェント** グループ ポリシー オブジェクトを編集するために、次の手順に従って開きます。

- Windows Server 2003 の場合:

グループ ポリシー オブジェクトをクリックし、**【編集】** をクリックします。

- Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016:
【グループ ポリシー オブジェクト】 で、グループ ポリシー オブジェクトを右クリックし、**【編集】** をクリックします。
- 2. グループ ポリシー オブジェクト エディタスナップインで、**【コンピュータ構成】** を展開します。
- 3. Windows Server 2003 および Windows Server 2008:
 - **【ソフトウェア設定】** を展開します。
- Windows Server 2012 および Windows Server 2016:
 - **【ポリシー】** > **【ソフトウェア設定】** を展開します。
- 4. **【ソフトウェア インストール】** を右クリックし、**【新規作成】** をポイントし、**【パッケージ】** をクリックします。
- 5. 以前に作成した共有フォルダにあるエージェントのインストール パッケージを選択し、**【開く】** をクリックします。
- 6. **【ソフトウェアのデプロイ】** ダイアログ ボックスで、**【詳細設定】** をクリックし、**【OK】** をクリックします。
- 7. エージェントを再インストールまたはアップデートする場合は、この手順をスキップしてください。

エージェントをインストールする場合は、次の手順を実行します。

- **【変更】** タブで **【追加】** をクリックし、以前に作成したトランスフォームを選択します。トランスフォーム ファイルは、**AcronisAgentWindows.mst** という名前で、エージェントのインストール パッケージと同じフォルダにあります。
8. **【OK】** をクリックして、**【ソフトウェアのデプロイ】** ダイアログ ボックスを閉じます。

手順 3: エージェント コア コンポーネントのグループ ポリシー オブジェクトの設定

1. **Acronis コア** グループ ポリシー オブジェクトを編集するために、次の手順に従って開きます。
 - Windows Server 2003 の場合:
グループ ポリシー オブジェクトをクリックし、**【編集】** をクリックします。

- Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016:
[グループ ポリシー オブジェクト] で、グループ ポリシー オブジェクトを右クリックし、[編集] をクリックします。
- 2. グループ ポリシー オブジェクト エディタスナップインで、[コンピュータ構成] を展開します。
- 3. Windows Server 2003 および Windows Server 2008:
 - [ソフトウェア設定] を展開します。Windows Server 2012 および Windows Server 2016:
 - [ポリシー] > [ソフトウェア設定] を展開します。
- 4. [ソフトウェア インストール] を右クリックし、[新規作成] をポイントし、[パッケージ] をクリックします。
- 5. 以前に作成した共有フォルダにある **AcronisAgentCore.msi** インストール パッケージを選択し、[開く] をクリックします。
- 6. [ソフトウェアのデプロイ] ダイアログ ボックスで、[詳細設定] をクリックし、[OK] をクリックします。
- 7. エージェントを再インストールまたはアップデートする場合は、この手順をスキップしてください。
エージェントをインストールする場合は、次の手順を実行します。
 - [変更] タブで [追加] をクリックし、以前に作成したトランスフォームを選択します。トランスフォーム ファイルは、**AcronisAgentCore.mst** という名前で、コンポーネントのインストール パッケージと同じフォルダにあります。
- 8. [OK] をクリックして、[ソフトウェアのデプロイ] ダイアログ ボックスを閉じます。

2.1.4 コンフィギュレーション スクリプトのパラメータ

コンフィギュレーション スクリプト **mst_gen.vbs** は、Acronis コンポーネント (Acronis Backup エージェント for Windows など) の .mst インストール パッケージ ファイル (トランスフォーム、変更、または変更ファイルとも呼ばれます) を作成します。

インストール パッケージとともにトランスフォームを使用すると、インストール パッケージを手動で実行するか、グループ ポリシーを使用して展開することで、コンポーネントを無人モードでインストールできます。

コンフィギュレーション スクリプトの完全な構文を次に示します。

```
mst_gen.vbs
  /msi_path <フル パス>
  [/target_dir <インストール フォルダ>]
  [/account <ユーザー名> <パスワード>]
  [/remote_users <ユーザー1>;<ユーザー2>;...;<ユーザーN>]
  [/ams_address <管理サーバー> /ams_user <管理者名> <パスワード>]
  [/cep_enabled]
  [{/serial <プロダクト キー> [/old_serial <以前のプロダクト キー
>] | /license_server <ライセンス サーバー> /product <製品コード> }]
  [/current_user]
```

角括弧 ([]) は、そのパラメータがオプションであること、または一部のコンポーネントにのみ適用されることを表します。波かっこ ({ }) は、パラメータが相互に排他的であることを表します。この場合、パラメータの各セットはパイプ (|) で区切られます。

ここでは、各パラメータと、パラメータを適用するコンポーネントについて説明します。

あらゆるコンポーネントに適用されるパラメータ

/msi_path <フル パス>

コンポーネントのインストール パッケージのフル パスを指定します。

D:¥folder¥AcronisAgentWindows.msi などのローカル パス、または
¥¥server¥folder¥AcronisAgentWindows.msi などの汎用名前付け規則 (UNC) の
パスを入力します。

/target_dir <インストール フォルダ>

コンポーネントのインストール先フォルダを指定します。

このパラメータを指定しなかった場合、コンポーネントはデフォルト フォル
ダ %ProgramFiles%¥Acronis (Windows の 32 ビット版) 、また
は %ProgramFiles(x86)%¥Acronis (Windows の 64 ビット版) にインストールされ
ます。

エージェント コアと管理コンソール コンポーネントにのみ適用されるパラメータ

次のパラメータは、インストール パッケージ AcronisAgentCore.msi および AcronisManagementConsole.msi にのみ適用されます。

`/cep_enabled`

これらの任意のコンポーネントがインストールされたコンピュータを Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム (CEP) に参加させるかどうかを指定します。

このパラメータを指定すると、ハードウェア構成、使用頻度の最も高い機能と最も低い機能、および問題に関する情報が自動的にコンピュータから収集されて、定期的に Acronis に送信されます。送信される情報は、前述のコンポーネントのいずれがコンピュータにインストールされているかで異なります。参加条件は、カスタム エクスペリエンス プログラム ウェブ ページで確認できます。

このパラメータを指定しないと、情報は送信されません。

エージェント コア コンポーネントにのみ適用されるパラメータ

次のパラメータは、インストール パッケージ AcronisAgentCore.msi にのみ適用されます。

`/account <ユーザー名> <パスワード>`

コンピュータで Acronis Managed Machine Service を実行するユーザー アカウントのユーザー名とパスワードを指定します。このコンピュータ上のエージェントはすべて、このサービスとして実行されます。このユーザー アカウントには適切な権限が必要です（「Acronis サービスのログイン情報の指定 『38ページ』」を参照してください）。ドメイン名とアカウント名は **mydomain¥User** のように円記号で区切ります。

このパラメータを使用しない場合、サービスはデフォルトのアカウント (**Acronis Agent User**) で実行されます。

`/remote_users <ユーザー1>;<ユーザー2>; · ;<ユーザーN>`

Acronis Remote Users グループに追加するユーザー名を指定します。このグループのメンバは、リモートからコンピュータに接続することができます。

このパラメータを指定すると、指定したユーザーのみがグループに追加されます。ユーザー名を複数指定する場合は、セミコロン (;) を使用して区切って指定します。

このパラメータを指定しないと、コンピュータ上の Administrators グループのすべてのメンバがグループに追加されます。

/ams_address <管理サーバー>

Acronis Backup 管理サーバーの名前または IP アドレスを指定します。このパラメータを指定すると、インストールの完了後、コンピュータが自動的に管理サーバーに登録されます。

/ams_user <管理者のユーザー名> <パスワード>

管理サーバーの **Acronis Centralized Admins** グループのメンバであるユーザーのユーザー名とパスワードを指定します。このパラメータは **/ams_address** パラメータとともに使用します。

ライセンスを必要とするコンポーネントにのみ適用されるパラメータ

次のパラメータは、インストール パッケージの AcronisAgentWindows.msi、AcronisAgentESX.msi、AcronisAgentHyperV.msi にのみ適用されます。

/serial <プロダクト キー>

コンポーネントのインストール時に使用するプロダクト キーを指定します。プロダクト キーは、ダッシュで区切られた一連の英数字です。プロダクト キーはダッシュも含めて正確に入力してください。

/old_serial <以前のプロダクト キー>

Acronis Backup & Recovery 10 または 11 からアップグレードする際に、このパラメータはその製品のプロダクト キーを指定します。このパラメータは **/serial** パラメータとともに使用します。

プロダクト キーがライセンス サーバーに保存されている場合は、代わりに

/license_server パラメータを使用します。

/license_server <ライセンス サーバー>

ライセンス サーバーがインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスを指定します。

このパラメータを使用する場合は、**/product** パラメータも指定します。

/product <製品コード>

製品のコードを指定します。

コードは次のとおりです。

Acronis Backup Advanced for Windows Server: **ABR11.5_ASW**

Acronis Backup for Windows Server Essentials: **ABR11.5_SBS**

Acronis Backup Advanced for PC: **ABR11.5_AW**

Acronis Backup Advanced Universal License: **ABR11.5_VE**

Acronis Backup Advanced for Hyper-V: **ABR11.5_VEHV**

Acronis Backup Advanced for VMware: **ABR11.5_VEESX**

Acronis Backup Advanced for RHEV: **ABR11.5_VERHEV**

Acronis Backup Advanced for Citrix XenServer: **ABR11.5_VEXEN**

Acronis Backup Advanced for Oracle VM: **ABR11.5_VEORCL**

Acronis Backup Advanced for SQL: **ABR11.5_SQL**

Acronis Backup Advanced for SharePoint: **ABR11.5_SP**

Acronis Backup Advanced for Active Directory: **ABR11.5_AD.**

注意 /serial および /license_server パラメータがどちらも指定されていない場合、コンポーネントはクラウド バックアップ専用でインストールされます。

管理コンソール コンポーネントにのみ適用されるパラメータ

次のパラメータは、インストール パッケージ AcronisManagementConsole.msi にのみ適用されます。

/current_user

コンポーネントを、コンピュータ上のすべてのユーザー用にインストールするのではなく、現在のユーザー用のみにインストールする場合に指定します。

グループ ポリシーを使用してコンポーネントをインストールする際は、インストールの「現在のユーザー」が通常はシステム アカウントであるため、このパラメータは使用しないでください。

2.1.5 管理サーバーのウェブ ページからのインストール

Acronis Backup 管理サーバーには、専用のウェブ サーバーおよびウェブ ページがあります。管理者または組織内のユーザーは、サポートされているウェブ ブラウザ 『58ページ』がインストールされた任意のコンピュータからこのウェブ ページにアクセスすれば、イン

ストール設定を指定せずに Acronis Backup をインストールすることができます。エージェントをインストールする際、セットアップ プログラムによってコンピュータが管理サーバーに登録されます。

ウェブ ページを使用することで、フォルダの共有が許可されていないネットワーク内のインストール パッケージにアクセスできます。

グループ ポリシーを使用したインストール 『48ページ』とは異なり、ウェブ ページからのインストールはユーザーが開始することができます。インストールは、ドメインのメンバーではないコンピュータ上で実行可能であり、Linux を実行しているコンピュータ* でも可能です。

ファイアウォールによってブロックされることが多いリモート インストール 『75ページ』とは異なり、ウェブ ページからのインストールでは、標準以外のネットワーク ポートを開放する必要はありません。インストールには、HTTP 用のポート（デフォルトではポート 8080）が使用されます。

Web ページが機能するには、**リモート インストールのコンポーネント**がインストールされている必要があります。管理サーバーをインストールする際、概要ウィンドウでこのコンポーネントがインストールされるコンポーネントに含まれていることを確認してください。インストール パッケージを保存するフォルダを指定することができます。

*Web ページに Linux 用のコンポーネントを追加するには、このコンポーネントをアクロニスのウェブ サイトからダウンロードします。その後で、対応する **installed-products** 要素を「インストール設定の変更 『60ページ』」で説明されている設定ファイルに追加します。これにより、Web ページからコンポーネントのインストール ファイルにアクセスできるようになります。Linux では設定ファイルの他の設定は無視されます。インストールするごとに、インストールの設定を手動で設定する必要があります。

2.1.5.1 サポートされる Web ブラウザ

Web ページには、次の Web ブラウザからアクセスできます。

- Internet Explorer 6 以降
- Mozilla Firefox 3.6 以降
- Safari 5 以降
- Google Chrome 6 以降

- Opera 10.6 以降

重要: ブラウザで JavaScript が有効になっていることを確認してください。

2.1.5.2 管理サーバー ウェブ ページの使用

管理サーバーのウェブ ページを開くには、ブラウザのアドレス バーに管理サーバーのコンピュータの名前または IP アドレスとポート番号を入力します。たとえば、

http://ams:8080 または **http://192.168.0.1:8080** と入力します。

ウェブ ページにデフォルト以外のポートを介してアクセスしなければならない場合、8080 以外のポートを指定します。

あらかじめ選択されたコンポーネントでのインストール

ウェブ ページを利用して組織内のユーザーが自分のコンピュータに Acronis Backup を簡単にインストールするには、次の方法に従います。

1. ウェブ ページにアクセスします。ユーザーがインストール可能な Acronis Backup のコンポーネントが一覧表示されます。
2. ユーザーがインストールする必要があるコンポーネントを 1 つ以上選択します。
3. **[ダウンロード]** リンクをコピーして、ユーザーに送信します。
4. ユーザーはそのリンクに従って、セットアップ プログラムを開始します。
5. セットアップ プログラムが実行されます。必須フィールド(ライセンス サーバーの名前など)はすべて、すでに入力されています。ユーザーは、設定を変更せずにインストール ウィザードを完了します。

現場で選択したコンポーネントでのインストール

経験豊富なユーザーがウェブ ページを利用して自分のコンピュータに Acronis Backup を簡単にインストールするには、次の方法に従います。

1. ユーザーが ウェブ ページにアクセスします。ユーザーがインストール可能な Acronis Backup のコンポーネントが一覧表示されます。
2. ユーザーが、インストールするコンポーネントを 1 つ以上選択します。
3. ユーザーが、**[ダウンロード]** ボタンをクリックします。
4. ユーザーが、セットアップ プログラムを開始します。

5. セットアップ プログラムが実行されます。必須フィールド(ライセンス サーバーの名前など)はすべて、すでに入力されています。ユーザーは、必要に応じて設定を変更してインストール ウィザードを完了します。

インストールの動作

セットアップ プログラム自体は、小さいサイズです。管理サーバーのコンピュータから、選択されたコンポーネントのインストール パッケージがダウンロードされます。

Windows にエージェントをインストールする場合は、セットアップ プログラムによって、エージェントのサービス専用のユーザー アカウントが作成されます。

2.1.5.3 デフォルトのインストール設定

セットアップ プログラムは、構成ファイルからインストール設定を取得します。このファイルは、管理サーバーのコンピュータに保存されています。

構成ファイルのデフォルト設定は次のとおりです。

- 管理サーバーに同梱されているライセンス サーバーを使用します。インストールされている各エージェントによって、そのライセンス サーバーから固有のライセンスが取得されます。
- 次のフォルダにコンポーネントをインストールします:
 - 32 ビット版 Windows: **%ProgramFiles%¥Acronis**
 - 64 ビット版 Windows: **%ProgramFiles(x86)%¥Acronis**
 - Linux: **/usr/lib/Acronis** (この設定を変更することはできません)

デフォルト設定の変更方法の詳細については、「インストール設定の変更 『60ページ』」を参照してください。

2.1.5.4 インストール設定の変更

デフォルトのインストール設定を変更するには、構成ファイルを編集する必要があります。

構成ファイルの名前は **settings.xml** です。ファイルは管理サーバーがインストールされているコンピュータに保存されます。ファイルは指定したインストール フォルダの **WebPage** サブフォルダにあります。デフォルトの場所は次のとおりです。

- 32 ビット版の Windows にインストールした場合: **%ProgramFiles%¥Acronis¥WebPage**
- 64 ビット版の Windows にインストールした場合: **%ProgramFiles(x86)%¥Acronis¥WebPage**

このファイルでは次の要素に設定が保存されます。

installed-products

ウェブ ページに表示するコンポーネントを指定します。各コンポーネントは **product** 要素として指定されます。たとえば、次のようになります。

```
<product
  name="Agent for Windows"
  package="AcronisAgentWindows.msi"
  type="win"
  description="ディスク、ボリューム、およびファイルをバックアップするには、コンピュータにエージェントをインストールします。"
/>
```

product 要素には次の属性があります。

name

ウェブ ページに表示されるコンポーネントの名前です。

package

コンポーネントのインストール パッケージの名前 (.msi、.i686、または .x86_64 ファイル) です。ファイル

は、**%CommonProgramFiles%\Acronis\RemoteInstaller\<製品のビルド番号>** フォルダにあります。

type

コンポーネントのインストール対象のオペレーティング システムです。この属性に使用可能な値は **win** (Windows) および **linux** (Linux) です。

description

ウェブ ページに表示されるコンポーネントの説明です。説明はコンポーネントの名前の下に表示されます。

ams

インストール後にコンピュータが登録される管理サーバー (AMS) を指定します。たとえば、次のようになります。

```
<ams address="ManagementServer" />
```

address 属性は、管理サーバーの名前または IP アドレスを指定します。

これは、ウェブ ページがインストールされているサーバーと同じサーバーにする必要があります。別のサーバーを指定しないでください。ただし、サーバーのネットワーク名をそれ自体の完全修飾ドメイン名 (FQDN) (ManagementServer.example.com など) または IP アドレスに変更することができます。これは、ダウンロードしたセットアップ プログラムではユーザー コンピュータを管理サーバーに追加できない場合に、役に立ちます。

license-server

インストール中に取得するコンポーネントのライセンスが保存されているライセンス サーバーを指定します。たとえば、次のようになります。

```
<license-server address="LicenseServer" />
```

address 属性は、ライセンス サーバーの名前または IP アドレスを指定します。

web-setup-settings

コンポーネントのインストール方法を指定します。

この要素の内容は次のとおりです。

acep

コンピュータを Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム (CEP) に参加させるかどうかを指定します。デフォルトの設定は次のとおりです。

```
<acep enabled="false" />
```

enabled 属性の使用可能な値は、**true** (参加を有効にする) および **false** (参加を有効にしない) です。

install

どの Windows ユーザーにコンポーネントをインストールするか、およびインストール中に必要なユーザーによる操作の程度を指定します。デフォルトの設定は次のとおりです。

```
<install for_user="all" mode="manual" />
```

for_user 属性の有効な値: **all** (コンピュータ上の全 Windows ユーザーに対して、コンポーネントをインストールします) および **current** (セットアップ プログラムを起動した Windows ユーザーのみを対象として、コンポーネントをインストールします)。

mode 属性は将来のバージョンで使用するために予約されています。現在使用可能な値は **manual** のみです。この値を指定すると、すべての必要なフィールドが既に入力された状態でセットアップ プログラムが実行されますが、ユーザーはインストール ウィザードの手順を実行する必要があります。

installation-path

コンポーネントのインストール先を指定します。

この要素の内容は次のとおりです。

x86

32 ビット版の Windows を実行しているコンピュータのコンポーネントのインストール先を指定します。

x64

64 ビット版の Windows を実行しているコンピュータのコンポーネントのインストール先を指定します。

どちらの要素でも、**path** 属性によってパスを指定します。デフォルトの設定は次のとおりです。

```
<x86 path="%ProgramFiles%/Acronis" />  
<x64 path="%ProgramFiles(x86)%/Acronis" />
```

Linux 用のコンポーネントは常に **/usr/lib/Acronis** ディレクトリにインストールされます。

2.1.5.5 ウェブ ページのポートの変更

デフォルトでは、ウェブ ページはポート 8080 を介して使用できます。別のプログラムがこのポートを既に使用している場合は、別のポートを指定する必要があります。

ポート番号は、管理サーバーをインストールする際、概要画面に表示されます。ポート番号を変更するには、コンピュータの役割の選択ウィンドウで、**[Acronis コンポーネントを手動で選択する...]** チェックボックスをオンにします。その後で、対応するウィンドウでポートを指定します。

管理サーバーが既にインストールされている場合は、次のようにウェブ サーバーを再構成することでポート番号を変更できます。

1. 次のフォルダにある **httpd.conf** ファイルを開きます。

- 32 ビット版
Windows: **%CommonProgramFiles%\Acronis\WebServer\conf**
- 64 ビット版
Windows: **%CommonProgramFiles(x86)\Acronis\WebServer\conf**

2. **Listen** 設定の値を使用するポート番号に変更します。たとえば、**Listen 8888** と設定すると、ウェブ ページ用にポート 8888 を使用することを意味します。

重要: 管理サーバーが、Acronis Backup の他のコンポーネントと通信するためのポートは指定しないでください。デフォルトでは、ポート 9876 です。

3. ウェブ サーバーのサービスを再起動します。次のいずれかの方法で実行できます。

- コマンド プロンプトで、次のコマンドを実行します。

```
net stop "Acronis Web Server Service"  
net start "Acronis Web Server Service"
```

- **サービス** スナップインで、**[Acronis Web Server Service]** を右クリックしてから、**[再起動]** をクリックします。

2.1.6 Acronis ライセンス サーバーのインストール

ライセンス サーバーは、Acronis Backup 管理サーバーと統合されます。このライセンスサーバーを使用することをお勧めします。

ライセンス サーバーを個別のコンポーネントとしてインストールする場合は、次の手順を実行します。

ライセンス サーバーを個別のコンポーネントとしてインストールするには

1. セットアップ プログラムを開始します。
2. **[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
3. 使用許諾契約の内容に同意します。
4. **[Acronis コンポーネントを手動で選択する...]** チェックボックスをオンにし、**[次へ]** をクリックします。
5. コンポーネントの一覧の **[その他のコンポーネント]** の下で、**[ライセンス サーバー]** チェックボックスをオンにし、**[次へ]** をクリックします。

[**ファイルからインポート**] をクリックして、プロダクト キーの一覧が含まれているファイルを指定します。複数のファイルを 1 つずつ指定することも、プロダクト キーを手動で入力することもできます。

詳細追加のプロダクト キーは、キーを含むファイルを指定するか、キーを手動で入力することによって、エージェントのインストール時などに後でいつでもインポートできます。

6. [**インストール先:**] と [**インストールの対象:**] のデフォルト値を使用します。

7. インストールを続けます。

2.2 Linux でのインストール

ここでは、Linux を実行しているコンピュータに Acronis Backup コンポーネントをインストールする方法について説明します。

コマンドライン パラメータを使用すると、無人インストール モードで製品をインストールできます。

2.2.1 準備

ここでは、Linux でのインストールの準備手順について説明します。

2.2.1.1 RPM パッケージ マネージャ

RPM パッケージ マネージャ (RPM) がシステムにインストールされていることを確認してください。RPM を使用していない Linux ディストリビューション (Ubuntu など) に製品をインストールする場合は、インストールの前に、次のコマンドを実行するなどして RPM を手動でインストールする必要があります。

```
sudo apt-get install rpm
```

RPM をインストール済みの Linux ディストリビューションには、Red Hat Enterprise Linux、Fedora、SUSE Linux Enterprise Server などがあります。

2.2.1.2 Linux packages

To add the necessary modules to the Linux kernel, the setup program needs the following Linux packages:

- The package with kernel headers or sources. The package version must match the kernel version.
- The GNU Compiler Collection (GCC) compiler system. The GCC version must be the one with which the kernel was compiled.
- The Make tool.
- The Perl interpreter.

The names of these packages vary depending on your Linux distribution.

In Red Hat Enterprise Linux, CentOS, and Fedora, the packages normally will be installed by the setup program. In other distributions, you need to install the packages if they are not installed or do not have the required versions.

Are the required packages already installed?

To check whether the packages are already installed, perform these steps:

1. Run the following command to find out the kernel version and the required GCC version:

```
cat /proc/version
```

This command returns lines similar to the following: **Linux version 2.6.35.6** and **gcc version 4.5.1**

2. Run the following command to check whether the Make tool and the GCC compiler are installed:

```
make -v  
gcc -v
```

For **gcc**, ensure that the version returned by the command is the same as in the **gcc version** in step 1. For **make**, just ensure that the command runs.

3. Check whether the appropriate version of the packages for building kernel modules is installed:
 - In Red Hat Enterprise Linux, CentOS, and Fedora, run the following command:

```
yum list installed | grep kernel-devel
```

- In Ubuntu, run the following commands:

```
dpkg --get-selections | grep linux-headers  
dpkg --get-selections | grep linux-image
```

In either case, ensure that the package versions are the same as in **Linux version** in step 1.

4. Run the following command to check whether the Perl interpreter is installed:

```
perl --version
```

If you see the information about the Perl version, the interpreter is installed.

Installing the packages from the repository

The following table lists how to install the required packages in various Linux distributions.

Linux distribution	Package names	How to install
Red Hat Enterprise Linux	kernel-devel gcc make	The setup program will download and install the packages automatically by using your Red Hat subscription.
	perl	Run the following command: <pre>yum install perl</pre>
CentOS Fedora	kernel-devel gcc make	The setup program will download and install the packages automatically.
	perl	Run the following command: <pre>yum install perl</pre>
Ubuntu	linux-headers linux-image gcc make perl	Run the following commands: <pre>sudo apt-get update sudo apt-get install linux-headers-`uname -r` sudo apt-get install linux-image-`uname -r` sudo apt-get install gcc-<package version> sudo apt-get install make sudo apt-get install perl</pre>

The packages will be downloaded from the distribution's repository and installed.

For other Linux distributions, please refer to the distribution's documentation regarding the exact names of the required packages and the ways to install them.

Installing the packages manually

You may need to install the packages **manually** if:

- The machine does not have an active Red Hat subscription or Internet connection.
- The setup program cannot find the **kernel-devel** or **gcc** version corresponding to the kernel version. If the available **kernel-devel** is more recent than your kernel, you need to either update the kernel or install the matching **kernel-devel** version manually.
- You have the required packages on the local network and do not want to spend time for automatic search and downloading.

Obtain the packages from your local network or a trusted third-party website, and install them as follows:

- In Red Hat Enterprise Linux, CentOS, or Fedora, run the following command as the root user:

```
rpm -ivh PACKAGE_FILE1 PACKAGE_FILE2 PACKAGE_FILE3
```

- In Ubuntu, run the following command:

```
sudo dpkg -i PACKAGE_FILE1 PACKAGE_FILE2 PACKAGE_FILE3
```

Example: Installing the packages manually in Fedora 14

Follow these steps to install the required packages in Fedora 14 on a 32-bit machine:

1. Run the following command to determine the kernel version and the required GCC version:

```
cat /proc/version
```

The output of this command includes the following:

```
Linux version 2.6.35.6-45.fc14.i686  
gcc version 4.5.1
```

2. Obtain the **kernel-devel** and **gcc** packages that correspond to this kernel version:

```
kernel-devel-2.6.35.6-45.fc14.i686.rpm  
gcc-4.5.1-4.fc14.i686.rpm
```

3. Obtain the **make** package for Fedora 14:

```
make-3.82-3.fc14.i686
```

4. Install the packages by running the following commands as the root user:

```
rpm -ivh kernel-devel-2.6.35.6-45.fc14.i686.rpm  
rpm -ivh gcc-4.5.1.fc14.i686.rpm  
rpm -ivh make-3.82-3.fc14.i686
```

You can specify all these packages in a single **rpm** command. Installing any of these packages may require installing additional packages to resolve dependencies.

2.2.1.3 インストール ファイル

インストール ファイルをダウンロードして、それらのファイルに対して必要なアクセス権限を割り当てます。

1. Acronis のウェブサイトアクセスします。
2. インストール ファイル (Acronis Backup のインストール時) またはファイル (Acronis Backup Advanced のインストール時) をダウンロードします。コンピュータのプラットフォーム (x86 または x86_64) に応じて、.i686 と .x86_64 のいずれかのファイルが必要になります。
3. 製品をインストールするコンピュータのディレクトリにインストール ファイルをコピーします。
4. インストール ファイルをコピーしたディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
chmod 755 AcronisBackup*
```

2.2.2 Acronis Backup Advanced の対話型インストール

Acronis Backup エージェント for Linux をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Acronis Backup Advanced のライセンスがあることを確認します。ライセンスを Acronis ライセンス サーバーにインポートすることができます。
エージェントを試用モード『4ページ』でインストールする場合やクラウド バックアップのみを使用する場合は、ライセンスは不要です。
2. ルート ユーザーとして、該当するインストール ファイル (.i686 または .x86_64 ファイル) を実行します。

3. 使用許諾契約の内容に同意します。
4. 次のいずれかを実行します。
 - 試用モードで製品をインストールするには、**[試用モードでのインストール]** をクリックします。
 - クラウド バックアップのみを目的として製品をインストールするには、**[クラウドバックアップ専用のインストール]** を選択します。
 - 製品を完全モードでインストールするには、次のいずれかの方法でプロダクト キーを指定します。
 - **[Select Acronis License Server] (Acronis ライセンス サーバーを選択)** を選択してから、ライセンス サーバーの名前または IP アドレスを入力します。
 - **[プロダクト キーの入力]** を選択し、Acronis Backup Advanced のプロダクト キーを入力します。
5. 管理サーバーにコンピュータを登録するかどうかを指定します。後で、コンピュータの名前または IP アドレスを使用して、コンピュータを管理サーバーに追加することもできます。
6. Red Hat Enterprise Linux または CentOS にソフトウェアをインストールする場合、セットアップ プログラムで、要求された Linux パッケージの一部が存在しないと通知されることがあります。これらのパッケージを自動的にインストールするには **[続行]** (推奨) を選択し、パッケージのインストールをスキップするには **[スキップ]** を選択します。必要なパッケージの詳細については、「Linux パッケージ 『66ページ 』」セクションを参照してください。
7. セットアップ プログラムは、Linux カーネル用の SnapAPI モジュールを自動的にコンパイルしようとします。インストールに失敗した場合、ファイル **`/usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery/HOWTO.INSTALL`** を参照してください。

Acronis Backup 管理コンソールまたは Acronis ブータブル メディア ビルダをインストールする手順は、次のとおりです。

1. ルート ユーザーとして、管理コンソールまたはブータブル メディア ビルダのインストール ファイル (.i686 または .x86_64 ファイル) を実行します。

2. 画面の指示に従います。

2.2.3 無人モードでのインストール

確認を求められない無人モードでコンポーネントをインストールするには、コンポーネントのインストール ファイルを **-a** コマンドライン パラメータで実行します。場合によっては、他のパラメータ 『72ページ』を使用してインストールの実行方法を指定する必要があります。

無人インストールの 2 つの例を次に示します。次の例では、32 ビットのインストール ファイル (.i686) を使用するものとします。同じパラメータが 64 ビットのインストール ファイル (.x86_64) で動作します。

例 1: プロダクト キーを指定した無人インストール。

次のコマンドは、プロダクト キー 12345-67890-ABCDE を使用し、無人モードで Acronis Backup をインストールします。

```
./AcronisBackupL.i686 -a -l 12345-67890-ABCDE
```

同じパラメータを使用し、対応する Acronis Backup Advanced インストール ファイルからエージェント for Linux をインストールできます。

例 2: ライセンス サーバーを指定した無人インストール。

この例は、Acronis Backup Advanced にのみ適用されます。

コマンドの例:

- このコマンドは、エージェント for Linux を無人モードでインストールします。
- このコマンドは、Acronis Backup Advanced for Linux Server ライセンスを使用します。プロダクト キーは、**licensesrv** コンピュータに置かれている Acronis ライセンス サーバーに保存されています。
- インストールが完了したら、**managementsrv** コンピュータに置かれている管理サーバーにコンピュータを登録します。

```
./AcronisBackupAdvancedAgentL.i686 -a -L licensesrv -P ABR11.5_ASL -C managementsrv -g srvadmin -w PassWd123
```

2.2.4 コマンドライン パラメータ

Acronis Backup のインストール ファイルを実行する際、1 つ以上のコマンドライン パラメータを指定できます。

共通パラメータ

特に説明しない限り、パラメータはすべてのインストール ファイルで指定できます。

-a または、**--auto**

デフォルトの対話型モードではなく、いわゆる無人セットアップ モードでインストールを実行します。

セットアップ プログラムは、プロダクト キーの入力や **[次へ]** のクリックなどのユーザーによる操作を要求せずに続行されます。

このパラメータを使用する場合は、**-i** パラメータを使用して、インストールするコンポーネントを指定する必要があります。

Acronis Backup エージェント for Linux のインストール ファイルを実行する場合、ライセンス サーバーまたはプロダクト キーも、それぞれ **-L** または **-l** パラメータを使用して指定する必要があります。

SnapAPI モジュールのコンパイルが必要で、コンパイルが可能な場合は、セットアップ プログラムは自動的にモジュールをコンパイルします。それ以外の場合は、コンパイルをスキップします。

-n または**--nodeps**

無人セットアップ時に依存関係を見逃します (前述の **-a** パラメータの説明を参照してください)。

このパラメータを指定すると、ソフトウェアの動作に必要なパッケージがインストールされていない場合でもセットアップは続行します。依存関係が不完全な場合は、ソフトウェアの機能が限定されます。

-u または、**--uninstall**

コンポーネントをアンインストールします。プロダクト キーまたはライセンス サーバーを指定する必要はありません。

-s または、**--disable-native-shared**

システム内に存在するライブラリの代わりに、インストール中にセットアップ プログラム独自の再配分可能なライブラリを強制的に使用します。

再配分可能なライブラリは、内部ツールの標準セットです。プログラムは、ユーザー インターフェイスの表示などにこれらのライブラリを使用します。

セットアップ プログラムは、必要なすべてのライブラリのコピーを含んでいます。デフォルトでは、システム内にこのライブラリが存在していない場合のみライブラリのコピーを使用します。このパラメータを使用すると、セットアップ プログラムで常にコピーが使用されます。

セットアップ プログラムのユーザー インターフェイスが正しく表示されない場合など、インストールに問題が発生した場合にこのパラメータを使用することができます。

-d または、 **--debug**

インストール ログに詳細な情報を書き込みます。

-i <コンポーネント名> または **--id=<コンポーネント名>**

Acronis Backup のインストールのみに適用されます。Acronis Backup Advanced では、コンポーネントはそれぞれ別のインストール ファイルからインストールされます。インストールするコンポーネント名を指定します。

Acronis Backup エージェント for Linux の場合: **BackupAndRecoveryAgent**

Acronis Backup ブータブル コンポーネントおよびメディア ビルダ:

BackupAndRecoveryBootableComponents

Acronis Backup 管理コンソールの場合: **ManagementConsole**

名前は大文字/小文字が区別されます。

-v または、 **--version**

製品のバージョンを表示して終了します。

-? または、 **--help**

ヘルプを表示して終了します。

--usage

使用方法に関する簡単なメッセージを表示して終了します。

Acronis Backup エージェント for Linux のインストール ファイルのみに適用されるパラメータ

-e {0|1} または **--ssl={0|1}**

他のコンポーネントに接続するための認証を有効にするかどうかを指定します。認証は、SSL (Secure Socket Layer) 証明書を使用して実行されます。

次の値を指定できます。

0: 認証を使用しない

1: 認証を使用する

-c <管理サーバー> または **--ams=<管理サーバー>**

Acronis Backup 管理サーバーの名前または IP アドレスを指定します。

このパラメータを使用するときは、管理サーバー管理者のユーザー名とパスワードをそれぞれ **-g** および **-w** パラメータを使用して指定する必要があります。

インストールの完了後、コンピュータは自動的に管理サーバーに登録されます。

-g <ユーザー名> または **--login=<ユーザー名>**

<管理サーバー> で指定した管理サーバー上にある **Acronis Centralized Admins** グループのメンバのユーザー名を指定します。

-w <パスワード> または **--password=<パスワード>**

<ユーザー名> で指定した名前のユーザーのパスワードを指定します。

-p <ポート番号> または **--port=<ポート番号>**

他の Acronis Backup コンポーネントへの接続に使用する TCP ポートの番号を指定します。デフォルトのポート番号は 9876 です。

インストール モードを決定するパラメータ

- コンポーネントを試用モードでインストールするには、**-T** パラメータを使用します。
- コンポーネントを完全モードでインストールするには、**-1** または **-L** パラメータを使用します。
- クラウド バックアップのみを目的としてコンポーネントをインストールするには、これらのパラメータを一切指定しないでください。

-T または、 **--trial**

コンポーネントを試用モードでインストールします。

-l <プロダクト キー> または **--serial**=<プロダクト キー>

コンポーネントのプロダクト キーを指定します。

-L <ライセンス サーバー> または **--license-server**=<ライセンス サーバー>

Acronis ライセンス サーバーの名前または IP アドレスを指定します。

このパラメータを使用するときは、製品のコードを **-P** パラメータで指定する必要があります。

-P <製品エイリアス>

Acronis Backup の製品コード（製品エイリアスとも呼ばれます）を指定します。コードは次のとおりです。

Acronis Backup Advanced for Linux Server: **ABR11.5_ASL**

Acronis Backup Advanced Universal License: **ABR11.5_VE**

Acronis Backup Advanced for VMware: **ABR11.5_VEESX**

Acronis Backup Advanced for Hyper-V: **ABR11.5_VEHV**

Acronis Backup Advanced for RHEV: **ABR11.5_VERHEV**

Acronis Backup Advanced for Citrix XenServer: **ABR11.5_VEXEN**

Acronis Backup Advanced for Oracle VM: **ABR11.5_VEORCL**

2.3 リモート インストール

エージェント for Windows やエージェント for Linux などの Acronis Backup のコンポーネントは、対応するオペレーティング システムが稼動している 1 つ以上のコンピュータにリモート インストールすることができます。

リモート インストールを実行するには、ターゲット コンピュータでの管理者権限が必要です。

リモート インストールは、次のいずれかの方法で実行できます。

- Windows が稼働しているコンピュータにインストールされた管理コンソールから実行します。
- コンピュータを 1 つ以上管理サーバーに追加します。

2.3.1 前提条件

管理コンソール

Windows が稼働しているコンピュータに管理コンソールがインストールされていることが必要です。

インストール パッケージ

コンポーネントは、インストール パッケージからインストールされます。デフォルトでは、パッケージはフォルダ `%CommonProgramFiles%\Acronis\RemoteInstaller\<製品のビルド番号>` から自動的に取得されます。コンソールが管理サーバーに接続されている場合、パッケージは、管理サーバーが存在するコンピュータから取得されます。接続されていない場合、パッケージはコンソールがインストールされているコンピュータから自動的に取得されます。

インストール パッケージが、このフォルダ（または、インストール中に指定できる別のフォルダ）に存在しない場合、次のように取得します。

Windows 用パッケージの取得方法

1. パッケージの自動取得元コンピュータで、Acronis Backup セットアップ プログラムを起動します。セットアップ ファイルはローカル フォルダになければなりません。
2. **[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
3. 使用許諾契約の内容に同意します。
4. **[変更]** をクリックします。
5. **[リモート インストールのコンポーネント]** チェックボックスをオンにして、**[次へ]** をクリックします。
6. 画面の指示に従います。

Linux 用パッケージの取得方法

必要なインストール ファイル (.i686 または .x86_64) を、Acronis ウェブサイトからダウンロードして、そのファイルを、パッケージの自動取得元コンピュータに保存します。

Windows コンピュータと Linux コンピュータの両方に Acronis コンポーネントをインストールする場合、Linux 用パッケージを、Windows 用パッケージが存在するディレクトリに保存します。これにより、Windows コンピュータと Linux コンピュータの両方に、Acronis コンポーネントのインストールを同時に設定できるようになります。

2.3.2 準備

Windows の場合

1. コンピュータがシステム要件 『25ページ』 を満たしていることを確認してください。
2. Windows XP を実行しているリモート コンピュータにインストールする場合は、そのコンピュータで **[コントロール パネル] > [フォルダ オプション] > [表示]** を選択して表示される **[簡易ファイルの共有を使用する (推奨)]** オプションが **[無効]** になっている必要があります。

Windows Vista 以降のリモート コンピュータで正常にインストールするには、**[コントロール パネル] > [フォルダ オプション] > [表示] > [共有ウィザードの使用]** をコンピュータで無効にする必要があります。

3. Active Directory ドメインのメンバになっていないリモート コンピュータに正常にインストールするには、ユーザー アカウント制御 (UAC) を無効にする 『78ページ』 必要があります。
4. **[ファイルとプリンタの共有]** が、リモートコンピュータで **[有効]** になっている必要があります。このオプションにアクセスするには
 - Windows XP Service Pack 2、または Windows 2003 Server が実行されているコンピュータの場合: **[コントロール パネル] > [Windows ファイアウォール] > [例外] > [ファイルとプリンタの共有]** を選択します。
 - Windows Vista、Windows Server 2008、または Windows 7 以降が実行されているコンピュータの場合: **[コントロール パネル] > [Windows ファイアウォール] > [ネットワークと共有センター] > [共有の詳細設定の変更]** を選択します。

5. Acronis Backup のリモート インストールには TCP ポート 445 および 25001 を使用します。また、リモート インストール、およびコンポーネント間の通信には、TCP ポート 9876 を使用します。

[ファイルとプリンタの共有] を有効にすると、ポート 445 が自動的に開かれます。ポート 9876 および 25001 は、Windows ファイアウォールによって自動的に開かれます。Windows ファイアウォール以外のファイアウォールを使用する場合、これらの 3 つのポートが受信要求と送信要求の両方に対して開かれている（例外に追加されている）ことを確認してください。

リモート インストールが完了したら、ポート 445 および 25001 を例外から削除することができます。ポート 25001 は、Windows ファイアウォールによって自動的に閉じられます。ポート 9876 は開いたままにしておく必要があります。

Linux の場合

1. コンピュータがシステム要件 『25ページ』 を満たしていることを確認してください。
2. 各コンピュータが、「インストール ファイル」手順を除き、エージェント for Linux のローカル インストール 『65ページ』 の前提条件を満たしていることを確認してください。
3. TCP ポート 22 が開いていて、各コンピュータで SSH デーモンが実行していることを確認してください。リモート インストールが完了したら、ポートを閉じて、SSH デーモンを停止します。
4. 各コンピュータの TCP ポート 9876 を開きます。Acronis Backup は、このポートを使用してコンポーネント間の通信を行うので、受信要求と送信要求の両方に対してこのポートを開いたままにしておく必要があります。

2.3.2.1 ユーザー アクセス制御 (UAC) の要件

Windows Vista 以降を実行し、Active Directory ドメインのメンバーになっていないコンピュータで、集中管理操作（リモート インストールを含む）を行うには、UAC が無効になっている必要があります。

UAC を無効にする手順は、次のとおりです。

オペレーティング システムに応じて次のいずれかを実行します。

- **Windows 8 より前の Windows オペレーティング システム:**

[コントロール パネル] → [表示方法: 小さいアイコン] → [ユーザー アカウント] → [ユーザー アカウント制御設定の変更] を選択し、スライダを [通知しない] に移動します。次にコンピュータを再起動します。

▪ **任意の Windows オペレーティング システムの場合:**

1. レジストリ エディタを開きます。
2. 次のレジストリ キーを見つけます。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Policies¥System

3. **EnableLUA** の設定値を **0** に変更します。
4. コンピュータを再起動します。

2.3.3 インストール手順

Acronis Backup のコンポーネントをリモートでインストールする手順は、次のとおりです。

1. 次のいずれかの方法でリモート インストールを開始します。
 - 管理コンソールから: 管理コンソールを起動します。[ツール] メニューで [Acronis コンポーネントのインストール] をクリックします。
 - 1 台以上のコンピュータを管理サーバーに追加する場合: 管理コンソールを管理サーバーに接続します。[アクション] メニューで [AMS へのコンピュータの追加] または [複数のコンピュータの追加] をクリックします。
2. コンポーネントをインストールするコンピュータを指定します 『80ページ』。1 台のコンピュータを管理サーバーに追加する場合は、そのコンピュータの名前または IP アドレスを指定して、そのコンピュータの管理権限を持つアカウントのログイン情報を指定するだけです。
3. インストールするコンポーネントを指定します 『82ページ』。
4. メッセージが表示されたら、選択したコンポーネントに応じて次の 1 つ以上のパラメータを指定します。
 - インストールの種類 (プロダクト キーを使用、または使用しない) 『83ページ』。
 - インストール オプション:

- エージェント サービスのログイン情報 『38ページ 』。デフォルトでは、セットアップ プログラムによってサービス専用のユーザー アカウントが作成されます。
- リモート コンピュータの再起動を許可するかどうか。
- コンピュータを管理サーバーに登録するかどうか。
- コンピュータを Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム (CEP) に参加させるかどうか。

5. 概要ウィンドウで、コンポーネントがインストールされるコンピュータの一覧、インストールされるコンポーネント、これらのコンポーネントのインストール設定を確認します。**[実行]** をクリックすると、インストールが開始します。

インストールが開始されると、コンポーネントがインストールされているコンピュータの名前が表示されます。

アップデート

リモート コンピュータ上の 1 つ以上のコンポーネントをアップデートするには、インストール手順を繰り返します。

2.3.3.1 コンピュータの一覧の指定

複数のコンピュータを Management Server に追加する際、またはリモート インストールを実行する際に、コンピュータの一覧を指定する必要があります。

コンピュータの追加

一覧にコンピュータを追加するには、次のオプションを 1 つ以上使用します。

IP/名前を指定	コンピュータ名または IP アドレスを入力し、管理権限があるアカウントのログイン情報を指定します。
ネットワークから	ネットワークを参照してコンピュータを指定します。個々のコンピュータ、ワークグループ全体、またはドメイン全体を選択できます。
Active Directory から	Active Directory ドメインを参照して、コンピュータを指定します。 このオプションは、管理コンソールがあるコンピュータがそのドメインのメンバーである場合のみ使用できます。

復元元ファイル	<p>.txt ファイルまたは .csv ファイルからコンピュータの一覧をインポートします。ファイルには、コンピュータ名または IP アドレスが記載され、1 行あたり 1 台のコンピュータが指定されている必要があります。</p> <p>例:</p> <pre>Machine_name_1 Machine_name_2 192.168.1.14 192.168.1.15</pre>
RHEV 環境から	<p>このオプションは、Red Hat Enterprise Virtualization の 4.0 より前を使用する場合のみ有効になります。Red Hat Virtualization (RHV) 4.0 以降では、別のオプションを使用します。</p> <p>Red Hat Enterprise Virtualization Manager に接続してコンピュータを指定します。RHEV Manager でアクセス権のあるアカウントのログイン情報を入力します。ドメイン名も必ず指定します (DOMAIN¥Username または Username@domain) 。</p> <p>RHEV コンピュータの一覧から、追加するコンピュータを選択します。</p>
アプリケーションを指定	<p>特定のアプリケーションがインストールされているコンピュータを選択します。[見つかったサーバーおよびクラスタ] フィルタを使用して、バックアップする必要があるアプリケーションがインストールされているコンピュータを表示します。</p> <p>このオプションは、コンピュータを Management Server に追加する場合にのみ有効です。Management Server はドメインのメンバである必要があり、ドメインからのみコンピュータを選択できます。</p>

ログイン情報の指定

各コンピュータに、そのコンピュータで管理者権限を持つアカウントのログイン情報を指定します。または、すべてのコンピュータで管理権限がある共通アカウントを指定することもできます。1 台のコンピュータにアカウント ログイン情報を入力し、**[すべてのコンピュータに適用する]** をクリックします。

注意: コンピュータが Active Directory ドメインのドメイン コントローラである場合は、そのドメインの名前をユーザー名と共に指定する必要があります。たとえば、次のようになります。

MyDomain¥Administrator

エージェントの検出

Management Server に追加するコンピュータを指定すると、Acronis Backup によって、エージェントがまだインストールされていないコンピュータが検出されます。検出が完了するまで待機することをお勧めします。

検出をキャンセルするには、**[状態の検出をキャンセル]** をクリックします。この場合、検出が完了したコンピュータにのみエージェントがインストールされます。検出をキャンセルしたコンピュータについては、エージェントが既にインストールされているコンピュータのみが Management Server に追加されます。

2.3.3.2 リモート インストールするコンポーネントの指定

デフォルトでは、インストール パッケージはフォルダ `%CommonProgramFiles%\Acronis\RemoteInstaller\<製品のビルド番号>` から自動的に取得されます。コンソールが管理サーバーに接続されている場合、パッケージは、管理サーバーが存在するコンピュータから取得されます。接続されていない場合、パッケージはコンソールがインストールされているコンピュータから自動的に取得されます。

異なるロケーションからパッケージを取得するには、**[コンポーネント ソースの変更]** をクリックします。次のオプションが利用できます。

- **登録済みのコンポーネント。** デフォルトのロケーションです。
- **リムーバブル メディア。** CD、DVD、BD、または USB フラッシュ ドライブなどのリムーバブル メディアでインストール パッケージを検索します。
- **次のロケーション。** インストール パッケージを取り出したローカルまたはネットワーク フォルダを指定します。資格情報の入力を求められた場合は、ユーザー名とパスワードを指定します。

エージェント for Windows および for Hyper-V は、エージェントコアコンポーネントに依存します。これらのエージェントをインストールする場合は、AcronisAgentCore.msi ファイルが同じ場所になければなりません。

インストール パッケージを取得する方法の詳細については「前提条件 『76ページ 』」を参照してください。

リモートでインストールできないコンポーネント

次のコンポーネントは、リモート インストールを使用してインストールできません。

- Acronis Backup エージェント for Exchange
- Acronis Backup エージェント for SQL
- Acronis Backup エージェント for Active Directory
- Acronis Backup エージェント for VMware
- Acronis Backup 管理サーバー
- Acronis Backup ストレージ ノード
- リモート インストールの Acronis Backup コンポーネント
- Acronis PXE サーバー
- Acronis ライセンス サーバー

2.3.3.3 プロダクト キーを使用する、または使用しないインストール

エージェントをインストールする際、プロダクト キーを指定するか、またはプロダクト キーを使用しないインストールを選択する必要があります。

プロダクト キーを使用しないインストール

[試用モードまたはクラウド バックアップ専用のインストール] を選択します。

試用モード 『4ページ』 でエージェントがインストールされます。

クラウド バックアップを利用するには、コンピュータ上でクラウド バックアップ サービスのサブスクリプションをアクティブ化する必要があります。クラウド バックアップは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで利用できます。

Acronis ライセンス サーバーにサブスクリプション キーをインポートしたり、インストール ウィザードのウィンドウに入力したりしないでください。

プロダクト キーの指定

次のいずれかを選択します。

- **プロダクト キーを手動で入力する。** ライセンス キーを入力するか、テキスト ファイルからライセンス キーをインポートできます。

コンピュータを管理サーバーに追加するときは、このオプションは利用できません。

- **次のライセンス サーバーにあるライセンスを使用する。**ライセンス サーバーまたは管理サーバーの名前または IP アドレスを指定し、サーバーのアクセス ログイン情報を入力します。

コンピュータを管理サーバーに追加する場合、管理サーバーが使用するライセンス サーバーが自動的に選択されます。変更できません。

[次へ] をクリックした後、使用可能なライセンスがコンポーネントに対して自動的に割り当てられます。

ライセンスの割り当ての表示と変更

[ライセンス] ウィンドウに、必須のライセンス数および不足しているライセンス数が表示されます。

1 つ以上のライセンスを追加するには、**[ライセンスの追加]** をクリックします。プロダクト キーを入力するか、テキスト ファイルからプロダクト キーをインポートできます。

ライセンスの割り当てを表示または変更するには、**[ライセンス マッピングの表示]** をクリックします。**[ライセンスのマッピング]** ウィンドウで、次のように、どのコンポーネントがどのライセンスを使用するかを設定できます。

1. **[コンピュータ]** 一覧でコンピュータをクリックします。
2. **[コンポーネント]** の下で、コンピュータ上のどのコンポーネントでライセンスが必要なのかを確認します。
3. **[使用中のライセンス]** の下で、対応するチェック ボックスをオンまたはオフにして、ライセンスが必要なコンポーネントに対してライセンスを割り当てるか、再割り当てします。

2.4 エージェント for VMware のインストール

エージェント for VMware は、ゲスト システムにエージェントをインストールすることなく、ESX(i) 仮想コンピュータのバックアップと復元を可能にします。

このエージェントは、次の 2 つのバージョンで提供されます。

- エージェント for VMware (仮想アプライアンス) は VMware ESX(i) ホストにインポートまたは配置することができます。
- オフロード バックアップのために、エージェント for VMware (Windows) は Windows コンピュータにインストールすることができます。

インストールする前に

Acronis Backup Management Server をインストールしてから、エージェント for VMware をインストールすることを強くお勧めします。エージェントのインストール中、エージェントの登録、またはライセンス サーバーの要求にはすべて (別にインストールしたライセンス サーバーの使用を選択した場合を除き)、Management Server を指定します。

VMwareエージェント (仮想アプライアンス)

エージェント for VMware (仮想アプライアンス) は次の3つの方法でインストールすることができます。

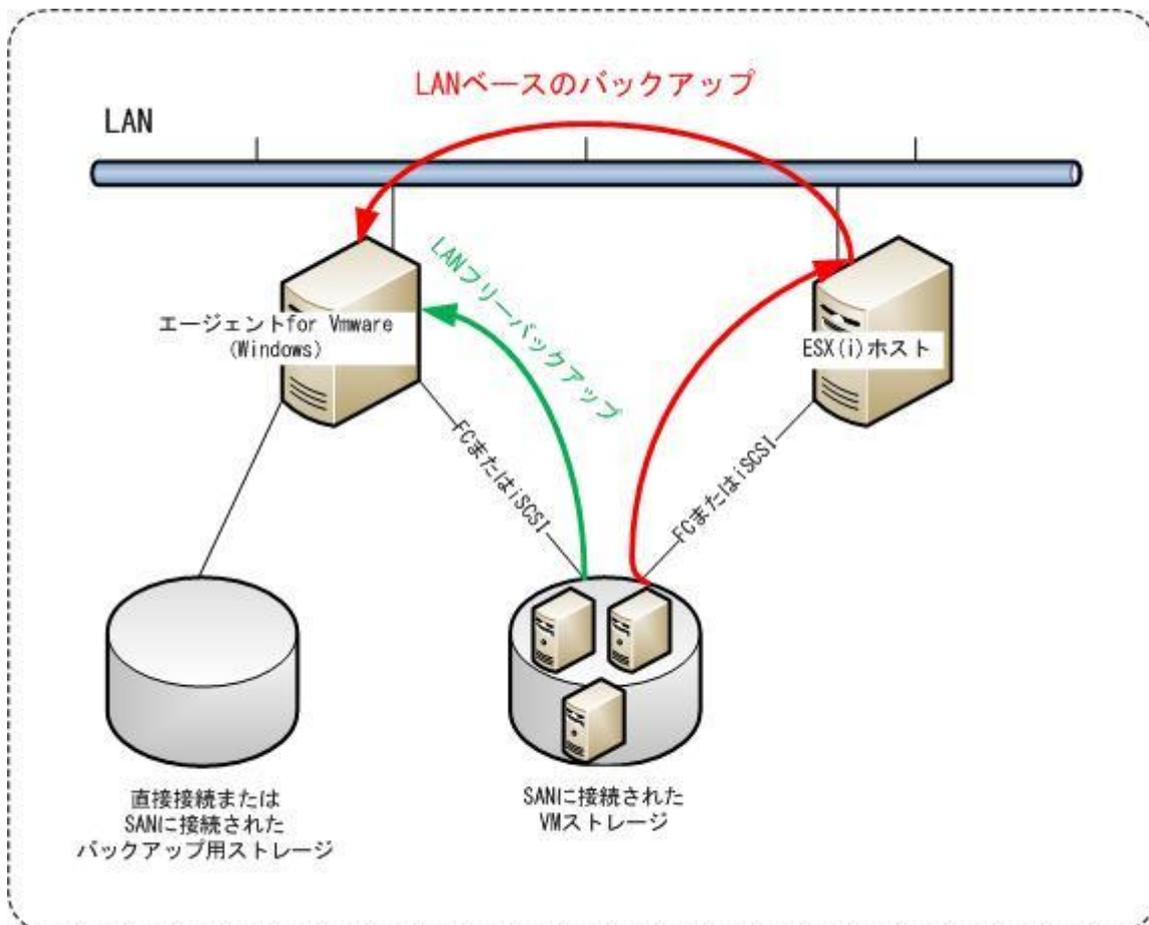
- OVF テンプレートとして ESX(i)ホストにインポート 『87ページ』 します。
VMware vSphere 6.5 を使用している場合は、この方法のみを使用することができます。それ以外では、トラブルシューティングを行う場合、または何らかの理由により Acronis Backup Management Server をインストールできない場合、この方法を使用します。
- Acronis Backup Management Server から指定したホストまたはクラスタに配置します。
コンソールを Management Server に接続します。[ナビゲーション] ツリーで、[仮想コンピュータ] を右クリックしてから [エージェント for VMware を配置する] をクリックします。手順の詳細については、コンテキスト ヘルプをご参照ください。
- Acronis Backup Management Server からの自動配置。
この方法が最も簡単です。ほとんどの場合、この方法をお勧めします。コンソールを Management Server に接続します。[ナビゲーション] ツリーで、[仮想コンピュータ] を右クリックし、[VMware vCenter 統合を設定する] をクリックします。vCenter サーバーを指定し、[自動配置] を有効にします。バックアップする仮想サーバーが選択されてもそのホストにエージェントがインストールされていない場合は常に、バックアップの開始時に仮想アプライアンスがそのホストに自動的に配置されます。

VMwareエージェント (Windows)

運用 ESX(i) ホストの負荷が非常に高く、仮想アプライアンスの実行が望ましくない場合、ESX インフラストラクチャ外部にある物理コンピュータへの**エージェント for VMware (Windows)** のインストールを検討してください。

使用している ESX(i) で SAN に接続されたストレージが使用されている場合は、このエージェントを、同じ SAN に接続されたコンピュータにインストールします。エージェントは、ESX(i)ホストおよび LAN を経由せずにストレージから仮想マシンを直接バックアップします。この機能は、LAN フリー バックアップと呼ばれます。

下の図は、LAN ベースのバックアップと LAN フリー バックアップを示しています。ファイバ チャンネル (FC) または iSCSI ストレージ エリア ネットワークがある場合は、仮想コンピュータに LAN フリー アクセスすることができます。バックアップされたデータを LAN 経由で一切転送しないようにするには、バックアップをエージェントのコンピュータのローカル ディスク、または SAN に接続されたストレージに保存します。



エージェント for VMware (Windows) は、Windows を実行し、システム要件 『25ページ』 を満たしている任意のコンピュータにインストールすることができます。「Acronis Backup Advanced の対話型インストール 『32ページ』」セクションの手順に従ってください。

インストール中に、エージェントによってバックアップされる仮想コンピュータを含む vCenter サーバーまたは ESX(i) サーバーを指定します。

この設定は、後で設定または変更することができます。エージェントをインストールした後にこの設定にアクセスするには、エージェントがインストールされているコンピュータにコンソールを接続し、トップメニューから **[オプション] > [コンピュータ オプション] > [エージェント for VMware (Windows)]** を選択します。

ライセンスの提供

エージェント for VMware を使用する場合、次のライセンスのいずれかが必要です。

- Acronis Backup Advanced for VMware
- Acronis Backup Advanced Universal License

エージェントのインストールにはライセンスは必要ありません。ただし、ライセンス サーバーを指定する必要があります。エージェントが仮想コンピュータのバックアップを開始すると、エージェントは仮想コンピュータのホストにライセンスがあるかどうかを確認します。ライセンスがない場合、エージェントは指定されたライセンス サーバーから無償のライセンスを取得し、それをホストに割り当てます。ホストがクラスタに含まれている場合、クラスタ化されたすべてのホストにライセンスが割り当てられます。したがって、クラスタ化された ESX(i) ごとに 1 つのライセンスが必要です。これにより、仮想コンピュータがクラスタの周りに移動されてもバックアップ計画を中断せずに済みます。

2.4.1 エージェント for VMware (仮想アプライアンス) のインポート

VMware vSphere 6.5 を使用している場合は、エージェント for VMware (仮想アプライアンス) のインストールにこの方法のみを使用することができます。それ以外では、トラブルシューティングを行う場合、または何らかの理由により Acronis Backup Management Server をインストールできない場合、この方法を使用します。

2.4.1.1 手順 1:OVF テンプレートの取り出し

VMware vSphere 6.5を使用している場合

1. Acronis ウェブサイトから 64 ビットのエージェント for VMware (仮想アプライアンス) のインストールパッケージをダウンロードします。
2. 64 ビットの Windows を実行しているコンピュータで、インストールパッケージを実行します。
3. 画面の指示に従います。

インストールが完了すると、仮想アプライアンスのファイルはフォルダ `%ProgramFiles(x86)%¥Acronis¥ESXAppliance` に置かれます。異なるコンピュータで vSphere クライアントを実行する場合、このフォルダを共有し、ユーザーに**読み取り**のアクセスを許可します。

VMware vSphereの6.5より前のバージョンを使用している場合

1. Windows を実行しているコンピュータで、Acronis Backup セットアップ プログラムを起動します。
2. **[インストール ファイルの取り出し]** をクリックします。インストール パッケージの一覧で、**[VMware エージェント (仮想アプライアンス) (AcronisVirtualAppliance.msi)]** チェックボックスをオンにします。
ヒント:代わりに、**[Acronis Backup のインストール]** をクリックして、**[Acronis コンポーネントを手動で選択する...]** チェックボックスをオンにしてから、コンポーネントの一覧で **[VMware エージェント (仮想アプライアンス)]** チェックボックスをオンにします。インストールを完了して、手順 3 および 4 をスキップします。
3. **[取り出し先]** に、仮想アプライアンスのインストール パッケージを取り出すフォルダを指定し、**[取り出し]** をクリックします。
4. 取り出したインストール パッケージを実行します。

インストールが完了すると、仮想アプライアンスのファイルはフォルダ `%ProgramFiles%¥Acronis¥ESXAppliance` (32 ビットの Windows の場合)、または `%ProgramFiles(x86)%¥Acronis¥ESXAppliance` (64 ビットの Windows の場合) に置かれます。異なるコンピュータで vSphere クライアントを実行する場合、このフォルダを共有し、ユーザーに**読み取り**のアクセスを許可します。

2.4.1.2 手順 2:OVF テンプレートの配置

1. vSphere クライアントを起動し、ESX(i) サーバーにログインします。
2. **【ファイル】** メニューで **【OVF テンプレートのデプロイ】** をポイントします。**OVF テンプレートのデプロイ** ウィザードに従います。
ヒント:VMware Infrastructure で、**【仮想アプライアンス】** を選択してから、**【インポート】** をクリックします。**仮想アプライアンスのインポート** ウィザードに従います。
3. **Source** で **Deploy from File** を選択して、仮想アプライアンスの OVF パッケージのパス、通常は、「%ProgramFiles%¥Acronis¥ESXAppliance」 (32 ビットの Windows の場合)、または「%ProgramFiles(x86)%¥Acronis¥ESXApplianc」 (64 ビットの Windows の場合) を指定します。
4. **【OVF Template Details】** を確認して、**【Next】** をクリックします。
5. **【名前と場所】** に、アプライアンスの名前を入力するか、デフォルト名 **AcronisESXAppliance** のままにします。
6. **【ネットワーク マッピング】** で、ネットワーク アダプタのブリッジ モードを選択します。
7. **【データストア】** で、仮想アプライアンス用の領域が不足している場合を除き、デフォルトのデータストアのままにします。領域が不足している場合には、別のデータストアを選択します。サーバーにあるデータストアが 1 つだけの場合は、この手順をスキップします。
8. 概要を確認して、**【完了】** をクリックします。配置の正常終了が報告されたら、進行状況のウィンドウを閉じます。

2.4.1.3 手順 3: 仮想アプライアンスの設定

1. 仮想アプライアンスの起動

vSphere クライアントで、**【インベントリ】** を表示し、仮想アプライアンスの名前を右クリックしてから、**【パワー】** > **【パワー オン】** をクリックします。

【コンソール】 タブをクリックします。仮想アプライアンスの Welcome 画面に次の操作の指示が表示されます。**【Close】** をクリックします。この画面には、仮想アプライアンス GUI でヘルプ ボタンをクリックするといつでもアクセスできます。

Acronis Backup エージェント for VMware の画面が表示されます。ここで、エージェントの構成を続けます。

2. タイムゾーン

[**仮想コンピュータ**] の下の [**タイムゾーン**] で [**変更**] をクリックし、管理コンソールがインストールされている場所のタイムゾーンを選択します。

ESX(i) サーバーは常に、GMT タイムゾーンで動作します。仮想アプライアンスは ESX サーバーにインポートされる際に、ESX サーバーの GMT タイムゾーンを継承します。コンソールが別のタイムゾーンで動作している場合、コンソールを使用してスケジュールしたタスクが適切な時刻に実行されるように、仮想アプライアンスをコンソールと同期させる必要があります。

3. vCenter/ESX(i)

[**エージェント オプション**] の下の [**vCenter/ESX(i)**] で、[**変更**] をクリックして、vCenter サーバー名または IP アドレスを指定します。エージェントが、vCenter サーバーによって管理されるすべての仮想コンピュータをバックアップおよび復元できるようになります。

vCenter サーバーを使用していない場合、仮想コンピュータをバックアップおよび復元したい ESX(i) ホストの名前または IP アドレスを指定します。通常、エージェントが、自分のホストに存在する仮想コンピュータをバックアップする場合、そのバックアップは速くなります。

エージェントが vCenter サーバーまたは ESX(i) への接続に使用するログイン情報を指定します。アカウントには vCenter サーバーまたは ESX(i) でのバックアップおよび復元に必要な権限を割り当てることをお勧めします。[**接続の確認**] をクリックすると、このログイン情報が正しいかどうかを確認できます。

これで仮想アプライアンスを動作させる準備が整いました。さらに、次の設定を変更することができます。

▪ ネットワーク設定

エージェントのネットワーク接続は DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使用して自動的に設定されます。デフォルトの構成を変更するには、[**エージェント オプション**] の下の [**eth0**] で [**変更**] をクリックして、必要なネットワーク設定を指定します。

▪ ローカル ストレージ

追加のディスクを仮想アプライアンスに接続して、エージェント for VMware によるバックアップ先を、ローカルに接続されたこのストレージにすることが可能です。通常、この方法でバックアップすると LAN 経由のバックアップより高速で実行でき、ネットワークの帯域幅を消費することはありません。

仮想ディスク サイズは 10 GB 以上必要です。仮想コンピュータの設定を編集してディスクを追加し、**[更新]** をクリックします。**[ストレージの作成]** リンクが使用できるようになります。このリンクをクリックし、ディスクを選択して、そのディスクのラベルを指定します。

既存のディスクを追加するタイミングには注意してください。ストレージを作成すると、既存のディスクに存在していたデータはすべて失われます。

2.4.1.4 手順 4: 管理サーバーへの仮想アプライアンスの追加

ホストから仮想コンピュータをバックアップできるようにするためのコンポーネントの最小構成には、**管理コンソール、ライセンス サーバー、およびエージェントが含まれます。この構成では、コンソールとエージェントの直接接続を使用して、仮想コンピュータをバックアップおよび復元できます。**

ただし、アクロニスは、ESX(i) ホストが 1 つしかなくても、Acronis Backup 管理サーバーをインストールおよび使用することを強くお勧めします。管理サーバーを使用すれば、エージェントを簡単に配置およびアップデートでき、仮想コンピュータのバックアップを設定および監視できます。パフォーマンスを向上させるために、複数のエージェントが同じホストを管理するように設定すると、管理サーバーによって、それらのエージェントに仮想コンピュータが自動的に分散されます。これは、各エージェントの負荷を均等にして、2 つのエージェントが 1 つの仮想コンピュータを同時にバックアップしようとした場合に発生する可能性があるスナップショットの競合を避けるうえで必要です。

管理サーバーを使用する場合は、管理サーバー上で仮想アプライアンスを登録します。

仮想アプライアンスを管理サーバーに追加する手順は、次のとおりです。

1. Acronis Backup 管理コンソールを起動します。
2. 仮想アプライアンス コンソールに表示される IP アドレスを使用し、管理コンソールを仮想アプライアンスに接続します。

3. トップ メニューから **[オプション]** > **[コンピュータ オプション]** > **[コンピュータの管理]** を選択します。
4. **[集中管理]** を選択し、管理サーバーの IP アドレスまたは名前を指定します。 **[OK]** をクリックします。
5. 管理サーバーの管理者アカウントのユーザー名とパスワードを指定します。 **[OK]** をクリックします。

または、アプライアンスをサーバー側の管理サーバーに追加することもできます。

2.4.2 エージェント for VMware (仮想アプライアンス) の更新

管理サーバーからの更新

この更新方法は、管理サーバー上に登録されている仮想アプライアンスのみに使用できます。この方法では、エージェントが管理している仮想コンピュータに関連するすべての構成設定（ローカル バックアップ計画、集中管理用バックアップ計画、およびグループ メンバシップ）が保持されるため、このセクションで後述する手動手順を実行する場合に最適です。

前提条件

このセクションで説明する操作を実行するために、Acronis Backup 管理サーバーではたक्सさんの TCP ポートが使用されます。

- ポート **443** および **902** は vCenter Server と ESX(i) のホストへのアクセスに使用されます。
- ポート **9876** は、エージェント for VMware (仮想アプライアンス) へのアクセスに使用されます。

管理サーバーがカスタム ファイアウォールを使用している場合、そのファイアウォールがこれらのポートへの送信接続を許可することを確認してください。Windows ファイアウォールは、Acronis Backup によって自動的に設定されます。

管理サーバーから vCenter Server、ESX(i) ホスト、またはエージェントへのトラフィックがルーターまたは同様のネットワーク デバイスを通過する場合、そのデバイスがそのトラフィックをブロックしないことを確認してください。

vCenter Server または ESX(i) ホストには、特別な設定は不要です。

管理サーバーから仮想アプライアンスを更新するには

1. 管理コンソールと管理サーバーを更新します。
2. コンソールを管理サーバーに接続します。
3. **[ナビゲーション]** ツリーで、vCenter サーバーと同じ名前のグループを右クリックします。VMware vCenter 統合が無効の場合は、**[仮想コンピュータ]** を右クリックします。
4. **[エージェント for VMware を更新する]** をクリックします。
5. 更新するエージェントを選択します。すでに最新バージョンのエージェントは選択できません。
6. **[エージェント for VMware を更新する]** をクリックします。

仮想アプライアンスが更新されます。エージェントの構成設定は保持されます。

手動更新

仮想アプライアンスの手動更新では、新しいアプライアンスのインストールと古いアプライアンスの削除を行います。この方法は、何らかの理由により管理サーバーから更新できない場合にのみ実行してください。

仮想アプライアンスを手動で更新した後は、そのアプライアンス上に存在していたローカルバックアップ計画を再作成する必要があります。

仮想アプライアンス (VA) を手動で更新するには、次の手順に従います。

1. 「エージェント for VMware (仮想アプライアンス) のインポート 『87ページ 』」に従って、新しい VA をインストールおよび設定します。
2. ESX(i) サーバーから古い仮想アプライアンスを削除 『109ページ 』します。
3. (オプション) VA に存在していたローカルのバックアップ計画を引き続き使用する場合は、**ローカルのバックアップ計画を再作成します。**
4. (オプション) **[エージェントによってバックアップされるすべての VM]** 条件が使用されている**動的グループ**内で、コンピュータのメンバシップを再確立します。メンバシップを再確立するには、グループの条件に更新された VA を指定します。

詳細: 更新中に古い VA が管理サーバーから削除されるので、上記のような動的グループ内におけるコンピュータのメンバシップは失われます。

集中管理用バックアップ計画に静的カスタム グループや動的カスタム グループを再追加する必要はありません。グループ内のコンピュータのメンバシップを再確立すると同時に、適切なバックアップ計画によって引き続きコンピュータが保護されます。

2.5 エージェント for Hyper-V のインストール

エージェント for Hyper-V により、仮想コンピュータにエージェントをインストールしなくても、Hyper-V ホストから仮想コンピュータのバックアップおよび復元を行うことができます。

準備

ライセンス: 十分な数の Acronis Backup Advanced ライセンス (ユニバーサルまたは for Hyper-V) があることを確認します。Hyper-V ホストごとにライセンスが 1 つ必要です。Hyper-V クラスタ (フェイルオーバー クラスタとも呼ばれます) を使用している場合は、クラスタのノードごとにライセンスを取得することをお勧めします。試用モードで製品を使用する場合、ライセンスは不要です。

管理サーバー: Acronis Backup 管理サーバーをインストールしてライセンスをインポートすることをお勧めします。Hyper-V クラスタを使用している場合は、管理サーバーをインストールすることで、実行されているノードに関係なくクラスタ化された仮想コンピュータをバックアップできるようになります。

インストール

Hyper-V ホストにエージェントをインストールします。Hyper-V クラスタ内で、クラスタの各ノードにエージェントをインストールします。

- Windows Server では、セットアップ プログラムからエージェントをインストールする 『31ページ』 ことができます。[このコンピュータのデータをバックアップする] チェックボックスをオンにして、画面の指示に従います。
- Microsoft Hyper-V Server では、リモートでエージェントをインストールする 『75ページ』 ことができます。

Acronis Managed Machine Service (エージェント) のアカウント情報の入力を要求されたら、Hyper-V クラスタのすべてのノードに対する管理者権限のあるドメイン ユーザーのアカウントを指定します。このアカウントを使用して、エージェントはどのノードの仮想コン

コンピュータにもアクセスできるようになります。また、このエージェントに新しいアカウントを作成することもできます。その後、集中管理用バックアップ計画または復元タスクを作成するときに、必要な権限を持つドメイン アカウントに対するログイン情報を指定する必要があります。

管理サーバーをインストールした場合は、インストール中に管理サーバーへのエージェントの登録を選択します。

2.6 その他の仮想化プラットフォームへのインストール

ESX や Hyper-V と異なり、以下の仮想化プラットフォームでは、仮想コンピュータにエージェントをインストールしておく必要があります。

- Citrix XenServer
- Red Hat Enterprise Virtualization (RHEV)
- Kernel-based Virtual Machine (KVM)
- Oracle VM Server、Oracle VM VirtualBox
- Parallels Server Bare Metal

サポートされている仮想化プラットフォームすべての一覧については、『仮想コンピュータのバックアップ』ドキュメントの「サポートされる仮想化プラットフォーム」を参照してください。

必要なライセンスについては、「仮想コンピュータのライセンス」 『17ページ』を参照してください。

仮想コンピュータのバックアップが必要である場合

Acronis Backup Agent for Windows または Acronis Backup Agent for Linux を、バックアップの対象となるすべての仮想コンピュータにインストールします。詳しい手順については、「Windows でのインストール」 『28ページ』、「Linux でのインストール」 『65ページ』、または「リモート インストール」 『75ページ』を参照してください。

Red Hat Enterprise Virtualization を使用している場合は、『仮想コンピュータのバックアップ』ドキュメントの「RHEV 仮想コンピュータのバックアップと復元」をしっかりと理解し

てください。このマニュアルには、エージェントのインストール、および管理サーバーへのコンピュータの追加手順が詳しく記載されています。

バックアップおよび復元操作は、物理マシンの場合と同じです。また、ブータブル メディアを使用して、空の仮想コンピュータに「コールド」バックアップや「ベア メタル」復元をすることもできます。

仮想化ホストのバックアップが必要である場合

Acronis Backup により、ホストされている仮想コンピュータと同じライセンスを使用して、物理ホストをバックアップできるようになります。

ホストで Agent for Windows または Agent for Linux でサポートされているオペレーティング システム（「サポートされるオペレーティング システム」 『18ページ』を参照）が実行されている場合、このホストに対応するエージェントをインストールできます。また、ブータブル メディアを使用して、「コールド」バックアップや「ベア メタル」復元をすることもできます。

ホストでサポートされているオペレーティング システムが実行されていない場合、ブータブル メディアを使用したセクタ単位でのバックアップ以外できません。このようなバックアップからの復元は可能ですが、Acronis は、システムが正常に起動し、完全に動作するかどうかは保証できません。

2.7 エージェント for Exchange のインストール

エージェント for Exchange は、Microsoft Exchange Server のメールボックスの役割を実行しているコンピュータにのみインストールできます。エージェントのリモート インストールを行うことはできません。

このエージェントは、Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムに含まれています。

エージェントはエージェント for Windows 『8ページ』 と共にインストールするか、エージェント for Windows が既にインストールされているコンピュータにインストールします。

インストールする前に

ライセンス: 十分な数のライセンスがあることを確認してください。Exchange Server ごとに 1 ライセンスが必要です。Exchange クラスタを使用している場合、クラスタのノードごとにライセンスを取得することをお勧めします。

エージェント for Exchange には、次のライセンスのいずれかが必要です。

- Acronis Backup Advanced for Exchange
- Acronis Backup for Windows Server Essentials
- Acronis Backup Advanced for VMware / Hyper-V / RHEV / Citrix XenServer / Oracle VM
- Acronis Backup Advanced Universal License

このライセンス 1 つにつき、同じコンピュータにエージェント for Windows をインストールできます。そのため、Exchange データベースとメールボックスに加えてコンピュータ全体をバックアップできます。

エージェント for Windows が既にインストールされている場合は、Acronis Backup Advanced for Exchange アドオン ライセンスを使用してエージェント for Exchange をインストールできます。

試用モードで製品を使用する場合、ライセンスは不要です。

要件: Exchange Server が次の要件に適合していることを確認してください。

- Microsoft Exchange Server 2013 の場合: 累積的な更新プログラム 1 (CU1) 以降がインストールされている必要があります。
- Microsoft Exchange Server 2007/2010 の場合: MAPI Client および Collaboration Data Objects (バージョン 1.2.1) パッケージがインストールされている必要があります。このパッケージをダウンロードしてインストールする方法については、<http://www.microsoft.com/en-us/download/details.aspx?id=36771> (英語) で詳細をご確認ください。
- Microsoft Exchange Server 2003 SP2 の場合:
<http://support.microsoft.com/kb/908072> の修正プログラムがインストールされている必要があります。

- Exchange ライター for VSS は、オンになっている必要があります。Windows Small Business Server 2003 の場合、ライターはデフォルトでオフになります。ライターをオンにする方法については、<http://support.microsoft.com/kb/838183/> の Microsoft サポート技術情報の記事を参照してください。

インストール手順

エージェントのセットアップには特定の要件があり、この要件はローカルの対話型インストール モードのみで確認できるため、エージェント for Exchange のリモート インストールは実行できません。

Exchange Server でのエージェントのインストール

1. セットアップ プログラムを実行します。
2. 対象のコンピュータの使用方法を確認するウィンドウが表示されたら、**[このコンピュータのデータをバックアップする]** チェック ボックスをオンにします。
3. 画面の指示 『32ページ』に従います。管理サーバーをインストールした場合は、インストール中に管理サーバーへのエージェント for Exchange の登録を選択します。

Exchange クラスタ ノードへのエージェントのインストール

Exchange クラスタでデータをバックアップするには、クラスタの各ノードにエージェントをインストールします。クラスタ ノードでエージェントをインストールするには、エージェント サービスに対して、ドメイン ユーザーの既存のアカウントを指定します。エージェントは、このアカウントを使用して、いかなるノードにあるクラスタ化されたデータにでもアクセスできます。このアカウントは、各クラスタ ノードに対する管理権限が必要です。

クラスタ ノードでエージェントをインストールするには

1. セットアップ プログラムを実行します。
2. 対象のコンピュータの使用方法を確認するウィンドウが表示されたら、**[Acronis コンポーネントを手動で選択し、インストール処理をカスタマイズする]** チェック ボックスをオンにします。
3. コンポーネント ツリーで、**[エージェント for Exchange]** を選択します。エージェント for Windows は自動的に選択されます。
4. 画面の指示に従います。

詳細: ログオンアカウントを Acronis サービスに割り当てるように指示されたら、**Acronis Managed Machine Service アカウント**で、**[既存のアカウントを使用する]**を選択し、各クラスターノードで管理権限を持っているアカウントを指定します。また、このエージェントに新しいアカウントを作成することもできます。その後、集中管理用バックアップ計画または復元タスクを作成するときに、必要な権限を持つドメイン アカウントに対する資格情報を指定する必要があります。

管理サーバーをインストールした場合は、インストール中に管理サーバーへのエージェント for Exchange の登録を選択します。

2.8 エージェント for SQL のインストール

エージェント for SQL を使用すると、シングル パスのディスクとアプリケーションのバックアップを作成したり、これらのバックアップから Microsoft SQL データベースを復元することができます。

エージェント for SQL をインストールできるのは、Microsoft SQL Server を実行しているコンピュータのみです。エージェントのリモート インストールはできません。

このエージェントは、Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムに含まれています。

エージェントはエージェント for Windows 『8ページ』 と共にインストールするか、エージェント for Windows が既にインストールされているコンピュータにインストールします。

必要なライセンス

エージェント for SQL には、次のライセンスのいずれかが必要です。

- Acronis Backup Advanced for SQL
- Acronis Backup Advanced for SharePoint
- Acronis Backup for Windows Server Essentials
- Acronis Backup Advanced for VMware / Hyper-V / RHEV / Citrix XenServer / Oracle VM
- Acronis Backup Advanced Universal License

このライセンス 1 つにつき、同じコンピュータにエージェント for Windows をインストールできます。エージェント for Windows が既にインストールされている場合は、次のいずれかのアドオン ライセンスを使用してエージェント for SQL をインストールできます。

- Acronis Backup Advanced for SQL アドオン
- Acronis Backup Advanced for SharePoint アドオン

試用モードで製品を使用する場合、ライセンスは不要です。

インストール

エージェント for Windows と同じようにエージェントをインストールします。詳細な手順については、インストールに関するドキュメントの「Acronis Backup Advanced の対話型インストール」 『32ページ』 セクションを参照してください。

Microsoft SQL インスタンスの資格情報

インストール時に、コンピュータにインストールされている Microsoft SQL インスタンスごとに **sysadmin** の資格情報を指定するよう要求されます。これらの資格情報は、エージェント サービス アカウントに **sysadmin** の役割を許可するために必要です。

資格情報の入力をスキップして、後で **sysadmin** の役割をエージェントに与えるには、次の方法があります。

- Acronis Backup 管理コンソールがコンピュータに接続しているときに、**[ツール] > [SQL Server 資格情報の指定]** をクリックする。
- SQL Server Management Studio を使用する。
- T-SQL スクリプトを実行する。

詳細については、製品ヘルプまたはユーザー ガイドの「SQL Server バックアップおよび復元の権限」を参照してください。

2.9 エージェント for Active Directory のインストール

エージェント for Active Directory を使用すると、シングル パスのディスクとアプリケーションのバックアップを作成したり、これらのバックアップから Microsoft Active Directory データを復元することができます。

エージェント for Active Directory は、ドメイン コントローラにのみインストールできます。エージェントのリモート インストールを行うことはできません。

このエージェントは、Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムに含まれています。

エージェントはエージェント for Windows 『8ページ』 と共にインストールするか、エージェント for Windows が既にインストールされているコンピュータにインストールします。

必要なライセンス

エージェント for Active Directory には、次のライセンスのいずれかが必要です。

- Acronis Backup Advanced for Active Directory
- Acronis Backup for Windows Server Essentials
- Acronis Backup Advanced for VMware / Hyper-V / RHEV / Citrix XenServer / Oracle VM
- Acronis Backup Advanced Universal License

このライセンス 1 つにつき、同じコンピュータにエージェント for Windows をインストールできます。エージェント for Windows が既にインストールされている場合は、Acronis Backup Advanced for Active Directory アドオン ライセンスを使用してエージェント for Active Directory をインストールできます。

試用モードで製品を使用する場合、ライセンスは不要です。

インストール

エージェント for Windows と同じようにエージェントをインストールします。Acronis Managed Machine Service の資格情報の入力を求められたら、ドメイン コントローラのビルトイン **アドミニストレータ** グループに含まれる既存のドメイン ユーザー アカウントを指定します。そうしないと、Microsoft Active Directory データのシングル パス バックアップが失敗します。

詳細な手順については、インストールに関するドキュメントの「Acronis Backup Advanced の対話型インストール」 『32ページ』セクションを参照してください。

3 Acronis Backup から Acronis Backup Advanced へのアップグレード

ライセンスの購入

アップグレードの前に、Acronis Backup のアップグレードを計画しているコンピュータごとに Acronis Backup Advanced のライセンスを購入してください。ライセンスの名前は、コンピュータに現在インストールされている製品に応じて異なります。

インストールされている製品	アップグレードに適しているライセンス
Acronis Backup for Windows Server	Acronis Backup Advanced for Windows Server
Acronis Backup for Linux Server	Acronis Backup Advanced for Linux Server
Acronis Backup for PC	Acronis Backup Advanced for PC

購入後、プロダクト キーが記載された電子メールがお手元に届きます。

製品のアップグレード

Acronis Backup から Acronis Backup Advanced へアップグレードするには、次の手順を実行します。

手順 1: ライセンスの変更

Acronis Backup をアップグレードするコンピュータごとに、次のようにライセンスを変更します。

1. Acronis Backup を実行します。
2. **[ヘルプ]** メニューで **[ライセンスの変更]** をクリックします。
3. **[ディスク/ファイルのバックアップのライセンス]** の右側にある **[変更]**、**[変更]** の順にクリックして、次に **[使用するプロダクト キー]** をクリックします。
4. このコンピュータの新しいプロダクト キーを入力します。
5. **[OK]** をクリックして新しいライセンスを適用し、警告メッセージで **[はい]** をクリックしてから、**[OK]** をクリックします。

以前にコンピュータに割り当てられたライセンスは取り消され、管理コンソールが再起動されます。これで、管理コンソールをリモート コンピュータに接続し、リモート ロケーションからこのコンピュータに接続することができるようになります。

手順 2: セットアップ プログラムのダウンロード

<http://kb.acronis.com/content/1642> (英語) の説明に従って、Acronis ウェブ サイトから Acronis Backup Advanced のセットアップ プログラムをダウンロードします。

手順 3: 管理サーバーのインストール

Windows を実行しているコンピュータに Acronis Backup 管理サーバーをインストールします。コンピュータのシステム ディスクに少なくとも 8 GB の RAM と 4.5 GB の空き領域が必要です。

製品をアップグレードしたコンピュータの 1 つに管理サーバーをインストールすることをお勧めします。これを行うための手順は、次のとおりです。

1. セットアップ プログラムを実行し、**[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
2. 使用許諾契約の内容に同意し、**[変更]** をクリックします。
3. コンポーネント ツリーで、**[管理サーバー]** を選択します。
4. 画面の指示に従います。ほとんどの場合、デフォルトの設定のままにします。

大規模な環境では、専用の物理サーバーまたは仮想サーバーを設定することをお勧めします。詳細については、Acronis Backup Advanced のインストールに関するドキュメント 『32 ページ』を参照してください。

手順 4: 管理サーバーへのアップグレード済みコンピュータの追加

1. 製品がアップグレードされた任意のコンピュータで、Acronis Backup を実行します。
2. **[管理サーバーへの接続]** をクリックし、サーバーの名前または IP アドレスを入力します。資格情報の入力が必要の場合は、管理サーバーの **Acronis Centralized Admins** グループおよび **Acronis Remote Users** グループのメンバーであるユーザーのユーザー名とパスワードを指定します。
3. **[ナビゲーション]** ツリーで  **[エージェントがインストールされているコンピュータ]** を選択します。
4. ツールバーの  **[複数のコンピュータの追加]** をクリックします。
5. 次のいずれかの方法で、アップグレードされたコンピュータを追加します。
 - アップグレードされたコンピュータの名前または IP アドレスを指定する。
 - ネットワークを参照する。
 - アクティブ ディレクトリ ドメインを参照する。
 - .txt ファイルまたは .csv ファイルからコンピュータの一覧をインポートする。

詳細については、Acronis Backup Advanced のインストールに関するドキュメントの「コンピュータの一覧の指定 『80ページ』」セクションを参照してください。

高度な使用に関するヒント

追加されたコンピュータは、管理サーバーの **[エージェントがインストールされているコンピュータ]** ビューに表示されます。

そのコンピュータのバックアップ計画は変更されません。管理サーバーでバックアップ計画を表示するには、コンピュータの名前を右クリックし、**[詳細の表示]** > **[バックアップの計画およびタスク]** を選択します。製品がバックアップを継続するため、アップグレードの前に作成されたバックアップから復元できます。

これで、複数のコンピュータを同時に 1 つのロケーションにバックアップする集中管理用バックアップ計画を作成することができます。

4 ソフトウェアのアップデートの確認

管理コンソールを開始するたびに、Acronis Backup によって、Acronis ウェブ サイトにソフトウェアの新しいバージョンがあるかどうかを確認されます。新しいバージョンが見つかった場合、新しいバージョンのセットアップ プログラムをダウンロードするためのリンクが提供されます。

アップデートを手動で確認するには、管理コンソールを開始し、**[ヘルプ] > [アップデートの確認]** をクリックします。このウィンドウで、アップデートの自動確認を無効にすることもできます。

アップデートの自動確認を有効または無効にする別の方法は、Acronis 管理テンプレートを設定する方法です。この場合、管理テンプレートで設定されたパラメータ値は、**[アップデートの確認]** ウィンドウの設定よりも優先されます。詳細については、製品ヘルプまたはユーザー ガイドの「管理用テンプレートを使用して設定されるパラメータ」を参照してください。

Acronis Backup のアップデートの詳細については、「アップデート」セクション 『47ページ』（Windows でのローカル インストールについて）または対応するインストール セクション（他のインストール方法について）を参照してください。

5 アンインストール

5.1 Acronis Backup Advanced のアンインストール

Acronis ライセンス サーバー上のライセンスを使用しているコンポーネントをアンインストールしても、ライセンスはコンピュータに割り当てられたままになります。別のコンピュータに対してこのライセンスを使用したい場合、ライセンスを手動で取り消します。

5.1.1 Windows でのアンインストール

5.1.1.1 対話型アンインストール

Acronis Backup Advanced またはそのコンポーネントをアンインストールする場合は、Windows の **[プログラムの追加と削除]** または **[プログラムと機能]** ツールではなく次の手順に従うことをお勧めします。

Acronis Backup Advanced のすべてのコンポーネントをアンインストールするには

1. **[スタート]** → **[すべてのプログラム]** → **[Acronis]** → **[Acronis Backup のアンインストール]** の順に選択します。
2. 関連情報を削除する場合は（後述の「関連情報の削除」を参照してください）、**[製品のログ、タスク、格納域および構成の設定を削除する]** チェックボックスをオンにします。
3. **[削除]** をクリックします。

Acronis Backup Advanced のコンポーネントまたは機能を個別にアンインストールするには

1. Acronis Backup Advanced セットアップ プログラムを開始します。
2. **[Acronis Backup のインストール]** をクリックします。
3. **[変更]** をクリックします。
4. アンインストールするコンポーネントまたは機能の名前の横にあるチェックボックスをオフにします。
5. 関連情報を削除する場合は（後述の「関連情報の削除」を参照）、**[製品のログ、タスク、格納域および構成の設定を削除する]** チェックボックスをオンにします。

関連情報の削除

後でコンポーネントを再インストールする場合は、関連情報をそのまま保持します。

関連情報を削除する場合は、**[製品のログ、タスク、格納域および構成の設定を削除する]** チェックボックスをオンにします。オンにすると、次の情報が削除されます。

- Acronis Backup エージェント for Windows をアンインストールする場合：エージェントのログとタスク

- Acronis Backup 管理サーバーをアンインストールする場合: 集中管理用バックアップ計画の設定、処理のログ、および統計データを保存している管理サーバー データベース
- Acronis Backup ストレージ ノードをアンインストールする場合: ストレージ ノードのログとタスク

5.1.1.2 無人アンインストール

Acronis Backup のコンポーネントまたは機能を無人モードでアンインストールするには、**msiexec** ユーティリティを実行します。このユーティリティでは、対応するインストールパッケージ (.msi ファイル) が使用されます。

コンポーネントまたは機能をアンインストールする手順は、次のとおりです

1. 対応するインストール パッケージをフォルダまたはネットワーク共有に取り出します。
2. 次のコマンドを実行します (ここでは、インストール パッケージ AcronisAgentWindows.msi が ¥¥myserver¥share ネットワーク共有に保存されていると仮定します)。

```
msiexec /uninstall \\myserver\share\AcronisAgentWindows.msi /qb
```

エージェントのアンインストール

エージェントをアンインストールする場合は、機能をアンインストールしてからエージェントをアンインストールし、それから Acronis Backup エージェント コア コンポーネントをアンインストールすることをお勧めします。

たとえば、エージェント for SQL をアンインストールする場合、次の順序でアンインストール コマンドを実行します。

```
msiexec /uninstall \\myserver\share\AcronisAgentMsSqlSinglePass.msi /qb  
msiexec /uninstall \\myserver\share\AcronisAgentWindows.msi /qb  
msiexec /uninstall \\myserver\share\AcronisAgentCore.msi /qb
```

ライセンス サーバーのアンインストール

Acronis ライセンス サーバーをアンインストールする必要がある場合は、このサーバーを使用しているすべてのエージェントをアンインストールしてから、ライセンス サーバーをアンインストールしてください。また、ライセンス サーバーは他の Acronis 製品によって使用されている場合もあります。

ライセンス サーバーは管理サーバーと統合されます。管理サーバーをアンインストールするには、次のコマンドを実行します（必要に応じてパスを変更してください）。

```
msiexec /uninstall \\myserver\share\AcronisManagementServer.msi /qb
```

個別のコンポーネントとしてインストールしたライセンス サーバーをアンインストールするには、次のコマンドを実行します（必要に応じてパスを変更してください）。

```
msiexec /uninstall \\myserver\share\AcronisLicenseServer.msi /qb
```

5.1.1.3 リモート アンインストール

リモート アンインストールには、**remote_uninstaller.exe** ユーティリティを使用します。これによって、Windows を実行している特定のコンピュータからすべての Acronis Backup コンポーネントをアンインストールできます。そのコンピュータのログ、タスク、格納域、および設定は変更されません。

このユーティリティは、Acronis Backup 管理コンソールまたは Acronis Backup 管理サーバーがインストールされたすべての Windows コンピュータで使用できます。ユーティリティへのパスは次のとおりです。

- 32 ビット版
Windows: **%CommonProgramFiles%¥Acronis¥BackupAndRecovery¥Common**
- 64 ビット版
Windows: **%CommonProgramFiles(x86)%¥Acronis¥BackupAndRecovery¥Common**

準備

それぞれのコンピュータでの準備のステップは、「リモート インストール 『77ページ 』」と同じです。

ユーティリティの実行

コマンド ラインで、ユーティリティへのフル パスと、必要なコンピュータのリストが格納されているテキスト ファイルへのフル パスを入力します。

ファイルを指定したそれぞれの行は、1 台のコンピュータについて次の形式で記述している必要があります。

```
<コンピュータの IP アドレスまたはホスト名>;<ユーザー名>;<password>
```

例

```
"%CommonProgramFiles%\Acronis\BackupAndRecovery\Common\remote_uninstaller.exe"  
C:\machines_list.txt
```

ファイル `machines_list.txt` には次の行が含まれます。

```
10.200.200.10;usr5;123456  
10.200.200.15;admin25;"654 321"
```

ユーティリティを実行すると、各コンピュータでアンインストールのプロセスが正常に開始されたかどうかが表示されます。アンインストールが成功したかどうかについて、ユーティリティは報告しません。

5.1.2 Linux でのアンインストール

Acronis Backup Advanced のすべてのコンポーネントをアンインストールするには

root ユーザーとして、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行して、Acronis Backup Advanced コンポーネントをアンインストールします。

```
# /usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery/uninstall/uninstall  
# /usr/lib/Acronis/BootableComponents/uninstall/uninstall  
# /usr/lib/Acronis/BackupAndRecoveryConsole/uninstall/uninstall
```

すべてのコンポーネントを無人モードでアンインストールするには、各 `./uninstall` コマンドに `-a` パラメータを付けて実行します。

2. 次のコマンドを実行して、SnapAPI モジュールのソース ファイルを削除します。

```
# rm -rf /usr/src/snapapi*
```

5.2 エージェント for VMware (仮想アプライアンス) の削除

Acronis Backup 管理サーバーでは、複数の ESX または ESXi サーバーからエージェント for VMware を簡単に削除できます。このセクションで後述するように別の手順もありますが、通常はこの方法を使用します。

コンソールを管理サーバーに接続します。[ナビゲーション] ツリーで、[仮想コンピュータ] を右ク

リックしてから **[エージェント for VMware を削除する]** をクリックします。手順の詳細については、コンテキスト ヘルプをご参照ください。

次のような場合は、エージェント for VMware (仮想アプライアンス)、または VA を手動で削除する必要があります。

- 仮想アプライアンスが管理サーバーに登録されていません。
- vCenter サーバーを使用していないか、vCenter サーバーとの統合が有効になっていません。
- 仮想アプライアンスが破損しています。

エージェント for VMware (仮想アプライアンス) を手動で削除するには

1. VMware vSphere クライアントを起動し、ESX(i) ホストまたは vCenter サーバーにログインします。
2. VA の電源をオフにします。
3. VA が仮想ディスク上でローカルに接続されているストレージを使用しており、そのディスク上にデータを保持したい場合、次の手順を実行します。
 - a. VA を右クリックしてから、**[設定の編集]** をクリックします。
 - b. ストレージが存在するディスクを選択してから、**[削除]** をクリックします。**[削除オプション]** で、**[仮想コンピュータから削除]** をクリックします。
 - c. **[OK]** をクリックします。

その結果、ディスクがデータストアに保持されます。ディスクを別の VA に接続することができます。

4. VA を右クリックしてから、**[ディスクから削除]** をクリックします。
5. VA を管理サーバーから削除します。アプライアンスが管理サーバーに登録されていない場合、またはすでに削除されている場合は、この手順をスキップします。

VA を削除するには、管理サーバーに接続して、**[すべての物理コンピュータ]** の一覧で VA を右クリックし、**[AMS からコンピュータを削除する]** をクリックします。

5.3 Acronis セキュア ゾーンの削除

Acronis Backup をアンインストールしても、Acronis セキュア ゾーンとその内容が影響を受けることはありません。引き続き、ブータブル メディアから起動するときに Acronis セキュア ゾーンからデータをリカバリすることができます。

Acronis セキュア ゾーンを削除する必要がある場合は、エージェントをアンインストールする前に、オペレーティング システムまたはブータブル メディアで次の手順を実行します。

Acronis セキュア ゾーンを削除するには

1. **[アクション]** メニューで **[Acronis セキュア ゾーン管理]** をクリックします。
2. **[Acronis セキュア ゾーン削除]** ウィンドウで、セキュア ゾーンから解放された領域を追加するボリュームを選択し、**[OK]** をクリックします。

複数のボリュームを選択した場合、領域は各パーティションのサイズに比例して分配されます。ボリュームを選択しない場合は、空き領域は未割り当てになります。

[OK] をクリックすると、Acronis Backup によってゾーンの削除が開始されます。

著作権情報

Copyright © Acronis International GmbH, 2002-2018. All rights reserved.

「Acronis」および「Acronis Secure Zone」は、Acronis International GmbHの登録商標です。

「Acronis Compute with Confidence」、「Acronis Startup Recovery Manager」、「Acronis Instant Restore」、およびAcronisロゴは、Acronis International GmbHの商標です。

LinuxはLinus Torvalds氏の登録商標です。

VMwareおよびVMware Readyは、VMware, Inc.の米国およびその他の管轄区域における商標および登録商標です。

WindowsおよびMS-DOSはMicrosoft Corporationの登録商標です。

ユーザーズガイドに掲載されている商標や著作権は、すべてそれぞれ各社に所有権があります。

著作権者の明示的許可なく本書を修正したものを配布することは禁じられています。

著作権者の事前の許可がない限り、商用目的で書籍の体裁をとる作品または派生的作品を販売させることは禁じられています。

本書は「現状のまま」使用されることを前提としており、商品性の黙示の保証および特定の適合性または非違反性の保証など、すべての明示的もしくは黙示的条件、表示および保証を一切行いません。ただし、この免責条項が法的に無効とされる場合はこの限りではありません。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある license.txt ファイルをご参照ください。ソフトウェアまたはサービスで使用されているサードパーティのコードおよび関連ライセンス条項の最新の一覧については <https://kb.acronis.com/content/7696>（英語）をご参照ください。

Acronis の特許取得済みの技術

この製品で使用されている技術は、以下の番号の 1 つ以上の米国特許によって保護されています。7,047,380 号、7,246,211 号、7,275,139 号、7,281,104 号、7,318,135 号、7,353,355 号、7,366,859 号、7,383,327 号、7,475,282 号、7,603,533 号、7,636,824 号、7,650,473 号、7,721,138 号、7,779,221 号、7,831,789 号、7,836,053 号、7,886,120 号、7,895,403 号、7,934,064 号、7,937,612 号、7,941,510 号、7,949,635 号、7,953,948 号、7,979,690 号、8,005,797 号、8,051,044 号、8,069,320 号、8,073,815 号、8,074,035 号、8,074,276 号、8,145,607 号、8,180,984 号、8,225,133 号、8,261,035 号、8,296,264 号、8,312,259 号、8,347,137 号、8,484,427 号、8,645,748 号、8,732,121 号、8,850,060 号、8,856,927 号、8,996,830 号、9,213,697 号、9,400,886 号、9,424,678 号、9,436,558 号、9,471,441 号、9,501,234 号、および出願中特許。